WASON
HQ
1104
J74+

Aug. 1899
no. 493

明治三十二年八月十日

女學雜誌

第四百九拾三號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百九十三號目次

◎社說
留學生に親切を盡すべし
基督敎に關する問答
續海舟餘波(六)
海外に行く日本人の誤解
日本公使館領事館の妻子
學生夏休の壯遊

◎家庭
恥の文學(其二)無識庵東根
妻の不平(再嫁のやもめ某)
家庭の死別
古敎新習(山下石翁)

◎史傳
讀史隨筆

◎文藝
案山子乃舍社中詠草(案山子乃舍主人、評點)

◎雜錄
本邦男女に關する道德統計
鬼面百相(其十)(靑柳有美)
審美學一端 …相貌論斷片

◎隨感
成敗利鈍を顧みずさは何の意ぞ○平安氣樂○面白し、亦面白くなし○さすらへる犬

◎寄書
曉想君(紅法師)

◎時報

◎要目一覽

社告

◎本誌は每月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗敎及び敎育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金		廣告料			送金
壹冊定價	拾錢	一行(廿七字詰)一回		前金拾錢	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし
半年分定價	壹圓拾錢	同	三回以上	一割引	
一年分定價	貳圓	同	六回以上	二割引	
(內國無郵稅)					
代金は總て前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事					

明治三十二年八月九日印刷
明治三十二年八月十日發行

發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工塲（電話本局十九番）

◎婦人科 ◉小兒科 專門

至誠醫院治療之趣旨

本邦婦女の特性として温柔靜肅を旨とし閨門深く垂れ籠めて猥りに人に接はらぬを眞家の庭訓となすが故に男子とは席を同ふし交を交すをさへ道に缺くるものとし語るべき病症殊に子宮疾患の如きは醫に就くを羞ぢ厭ふが爲めに唯密かに心を痛め身を苦しめ終には人生の快樂を殺ぎ子孫の繁榮を遮ぎり天壽を天折するもの尠なからず豈嘆かはしき至ならずや　本院長も又是國風の間に人となり深く此弊を憂へ之を救ふの道もがなと慨然婦女の分として妄りに身を挺んで尊榮にして深邃なる醫學に志し研鑚多年その業を卒へ爾來又た數年東西の諸大家に就きて特に婦人科を研究して刀圭に從事する所以のものは己れ女性に生れたるの天職たるを信じて泥み近づき易く打ち解け語らひ易き同胞姉妹の疾患に對しては能く貞淑の美德を傷けず愼重懇切に治療し得るは竊かに諸大家に讓らざるの特技あるを期す又小兒科にありては第一の慈母として狎れ懷き易きが故に幼兒をして畏ぢ怯れ失聲啼泣せしむるが如きことなく安靜に診療を施し得るを以て誤診姑息等の弊なしとす是れ本院長が起ちて世の同胞に告ぐる所以なり

院長女醫鷲山强生診察　本院午前　分院午後

本院麴町區飯田町四丁目九番地
分院京橋區宗十郎町一番地

至誠醫院

女學雜誌
第四百九拾三號
明治三十二年八月十四日發兌

社說

留學生に親切を盡すべし

◎日本は東洋の先導者なれば、不斷、先輩たるの覺悟を以て其の後進を誘導せねば成らぬとである。後進に親切を盡すは、素と人たるの義務であり高德であるのみならず、且つ、其の利益である。後進に親切を盡すものは、後進の進步に押されて自らも亦た進步するが、後進に不親切なものに限つて、遠からず進路から蹴落され、後なるもの先となり、昔の若輩に嘲けられ、眞とに憫れむべき末路に沈むものである。日本すでに、東洋の先覺者たる榮譽を荷ふ以上は、亦た之に相應はしき覺悟を懷かねばならぬ。其の地位にあつて、夫れ相應の覺悟なきものは、天の試驗に落第して、其地位を奪わるると、嚴然明白である。

◎支那、朝鮮より、既に多數の留學生渡來せるとなるが、此後、此上に、尙ほ續々として多數の來學者あらんとは、勢ひの睹易きものである。而して、其の結果の及ぼす所ろ、其の感化勢力の及ぼす所も亦た太はだ想像し易きとゆへ、方今の政客策士は、たゞ其の利益の在る所ろに勘定して、只管ら利足の計算に忙はしい姿であるが、成程、日月が立てば夫丈け收入はあるに相違ないとしても、之丈けに着目して其他を考へぬものは、金貸、高利貸の仲間だ。利足は取れるとしても同時に怨まれるとは逃れぬ。

◎日本の留學生、最初、英吉利、亞米利加に留學したものは、啻に學問技術の新奇なるに驚ろいたるのみならず、其の國民の如何にも親切なとに驚ろいた。親切も親切、眞とに思ひ切つたほどの親切で、頭から爪先まで、起るから寢る迄、よく斯く親切が盡されるものかと思ふ程に親切を盡された相

ナ。夫故、たとひ宗教上の意見は頑として動かぬとしても、又、國粹崇拜の大和魂しひは毫しも減らさず、日本人たる誇りと敵愾心は一分も失わぬとしても、彼の西洋人の親切と、眞心とは、晝夜忘れることが出來ぬ。歸朝して、ツイ不情になつて音信を怠たつても、彼等は十年一日の如き親友附合で、よく〱斯る熱愛を手廣の交際中に維持してゆけるものかと驚ろき、千里東西の隔たりも、隣の如く、十年不見の疎濶も昨日今日の樣に思ひ、一種言ふ可らず斷つ可らざる情交を一生結束する樣になると云ふことは、其の經驗ある人の毎度申されることであるが、即はち之れ微妙の感應を總ての事業に灑そぎ、東西を一つにする世界的思想の上に、何ものを以ても消殺しがたき一大信用を築かせた基である。

◎然るに、我國に留學せる支那、朝鮮の書生に對しては、待遇、愛顧、いかにも不足の樣に感ぜられる。其の敎えは學問計りで、其他に何もの〻無くてならぬかを考へてやる人も少ない樣である。彼等未開の國から當地に來れるは、餘程の奮發で、故郷を距る其の隔程數万里もあるやうに思つて居るであらふ。左なきだに客人孤窓の憂き事は、古へより物の本に多く見へることであるが、彼等は路上にも、交際にも、何んとなく身巾せまく感ずるやうな事にのみ出で合わであらふ。頑是なき子供にすら嘲けられ、物識れる人の新聞雜誌にすら、曾て自分等の國を賞めたとの書いてあるものは一つも見ない。彼の人々の心は、さぞかし寂寥極まることであらふ。

◎一躰、開港場に來て居た西洋人等が、日本人に對して無禮な事をすると云ふことは、曾て甚はだしく憤慨せられたることであるが、其后は朝鮮、支那、もしくは臺灣などに出稼ぎして居る日本人が彼等の國人に對する處置は、中々それ位ひの比ではないことを見聞した。何れにせよ、下等無敎育の人のすることで、之を以て國民全躰の品位を直ぐに定ることは出來ぬが、日本人が可憐なる東洋海外の諸國民に對するに、甚はだ其の當を得ぬと云ふことは言を逃るゝ道があるまい。日本人は義俠の人民だと自から任ずることもあるが、吾が誘導すべき國と定まつたる東洋后進の國に對して、如斯く冷淡不親切であつては、第一、人道に對して濟まざるのみならず、自から考がへても、亦頗ぶる恥かしい見識である。

◎よつて我國に來る諸外國人を十分にもてなすことは先づ出來

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にくいとしても、書生として日本に來り、日本の文物を慕つて學問をして居る愛すべき留學生に對しては、先づ以て一層の親切を盡したいヿであるが、夫には敎師たり、男子たるもの、覺悟を要すはヿ勿論として、別に、亦た婦人たるもの、心得を必要する一事を忘れてはならぬ。彼等留學生は、家を離れて來て居る。其の最上の慰さめは、家らしき家を得るヿである。田舎の書生が東京の學校に來て居る時でも、塾や下宿屋の生涯は如何にも不愉快であるから、ツイ、牛肉屋などに散財して、せめての慰さめを得んとするヿであるが、東京に親類でもあるか、心やすい家でもあつて、日曜日などに折々出入するヿが出來ると、ソレハ〳〵愉快極まるヿで、たゞ家庭といふもの、中に入れて貰つて、其の空氣を吸わせて貰ふ丈けで、空いた腹が一パイになるやうな心持のするものである。同じ日本人で、日本の中の、その都に留學した丈けでも、既に斯樣である。故に、海外より來た留學生で、何處を見ても、他人、否な他人所ではない、皆な我を馬鹿にして居るやうに見へる中に、挾まれて居るのであるから、學校の休日になつても、何處へも行く所がない。にぎやかで人の多い所へ行つても、心安い人が無いければ、にぎやかな程、實は心さびしいものである。偶まに、飲食店に上つても、何んだか馬鹿にされて、高く取られるやうな心持がする。眞ヿに、不愉快極まるヿであらふ。夫で、此の不愉快を慰さめ、其の滿しがたき不滿足を滿すものは、親切な家庭に往來するやうになつて、心安い、優しい、婦人の待遇を受るヿである。前に述べた日本の留學生が洋行中に感じた親切と云ふものは、即わち此の親類で、多くは家庭の中に於て得た厚遇の記臆である。其の親切は、眞ヿに小さな、些細の事の集合で、ホコロビを縫つてやるとか、好なものを料理して上るとか云ふ類で、つまり他人らしく、冷たく、儀式ばつて扱かわず、氣樂に出入して、我を家庭の中に入れてくれると云ふ自覺を得させる丈で即わち滿足なのである。夫には、此主意に關して婦人の心得を要するヿ勿論であるが、婦人がソウしたいと思つても、男子が賛成せねば、夫も出來ぬヿである。夫故、男子、女子、共もに此主意に贊成せられ、今少し留學生に親切を盡すやうに爲されたいものだと思つて居る。

◎もし左もなくして、今のまゝにして歸したらば、彼等留學

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生の一生に紀念する所ろは、容易すく想像が出來る。「日本では技術を學んだが、其外には何も得ない。日本人は極めて不親切な國民で、吾々を馬鹿にして居る人々である」と云ふ記臆が何時迄も念頭に刻まれて居るとして、扨て此の記臆が、事業の上に、國際の上に及ぼす影響は如何なるものであらふ。爲めに、東洋列國の將來に及ぼす影響は如何なるものであらふ。

基督敎に關する問答

曾ては臺閣に列し、敎學の事に心掛けある、某君に會し、偶たま基督敎に關しての談話を爲す。左に、其の梗槪を記戴するものは、世上一派の流潮を見めすの故なり。

◎吾輩には一つの案があるです。夫を發表したら、耶蘇の人も、敵も、ビツクリする程のものです。實に驚ろくべき名案で、忽まち耶蘇敎を振ひ起すとの出來るものです。

◎ハヽア、どふ云ふ御名案ですか伺がひたいものですが。一躰、案と云ふものは、案だけでは何にもならんものです。

◎イヤ、驚ろくべき者で、古今未發の案です。元來、耶蘇敎の人の色々の議論を見るに、どうも窮して居る樣です。兎角、受身です。「敎育宗敎の衝突」などゝ云ふ論に對しても、如何にも窮した言譯です。アンナ事でなく、此方から引くり返して、忽まち全勝を得るの方です。

◎元來、衝突などゝ云ふとはありません。宗敎を信ずるものゝ心から見ては、一つも衝突などは無いのです。敎育と宗敎の衝突などと云ふ論もあつた樣ですが、馬鹿氣切つたとですから、相手にはしなかつた筈です。固より、三流四流の人々が辯解もしたか知れんですが、夫は基督敎界の議論として見るべきものではありません。アナタ方の仲間でも、見當の違つた議論に一々辯解を爲さいますか。爲るものは、ホンノ末派の事でせう。

◎イヤ、たゞそう大風呂敷の論では面白くないです。某が佛敎を論ずるやうに、「イヤ、夫も佛敎にあります」などゝ云つて、何でも引付けて仕舞ふのはイカンデステ

◎夫は面白くないです、たゞ衝突しないと云ふ丈です。子供と大人と衝突はしますまい。子供が譯も分らぬとを言へば、

よく、言つて聞かせる丈です。道で邪魔をすれば、よけさせる丈です。衝突と云ふのは、相手にした時の話しですが、宗教の確信には、衝突と云ふものはありません。教育の方では基督教と衝突するなどゝ、己惚れて居ても、衝突などのある筈はありません。元來、宗教の確信では、我一心の中に於ても一つも衝突がなく、徹底せる生命となるものですが、之を發表して萬事に施こすに、一つも衝突はありません。邪魔ものは壓倒するともありませう。よく言つて聞かせるともありませう。夫丈けです。ソコデ、あなたの案と云ふは、帝室に關しての事ではありません乎。

◎イヤ、そうではありません。

◎それでは、教理とか、傳道法とか云ふものでせう。

◎先づ教理ですが、耶蘇教の眞との特色で、其の精神と云ふものは看破つた積りで、夫が古人未發です。

◎アナタは、基督や、釋迦の傳道を爲さつたお心持は、互いに違つて居るかと思ひなさるのです乎。

◎夫は皆な似たものでせうが、亦自から相違がありませう。一人は猶太風、一人は印度風と云ふやうに。

◎夫では、亦た日本風にするのが教祖のお心であると思ひなさいますか。

◎先づ左樣でせうが、一つ違つたものが耶蘇教にあると發見したのです。

◎夫はあると思ひます、吾々も夫を信じて居るのですが、一躰、教理、教義などは、あとから造るもので、基督御自身にソンナ論はなし、又、あとから造つて善いものと思ひます。

◎ナニシロ、今の日本の基督教は、甚はだ元氣が無いようですナ

◎所云ゆる過渡、雌伏、修養工夫の時節で、ソウ見へるのでせう。中々な人物が居て、皆な準備して居ます。夫が無ければ衰ろへたのですが、今は衰ろへたのでなく、勃發せんとする準備時代です。親鸞や、日蓮の起る前でも、中々の準備です。いよ〳〵起つてからでも、初は、コヂキ坊主です。夫を見分けなければ、俗物が皆な隆盛だと言ふ時迄は、いつ迄も衰微だと言つて居らねばなりませぬ。

◎ソンナ人があれば善いですが、先づ誰々ですか。

◎…………然し、先づ大躰は何處も種切れの樣です。アナ

タ方のお仲間でも、政黨でも、文學者でも、先づ種切の風ですナ。世は奇躰なもので、何處からも一齊に人物が出ます。時代の勢ですかナ。政治界に人傑が出る比には、宗教界にも偉人が出ませう。先づ當分はお互ひに何處も種切でせう。ソレデ、御名案と云ふのは。

◎まだ少し研究中です。

◎夫では、追つて伺がふとして、すべて名案は御演説なすつちやあいけません。法は人を待つて行われるものですシ、案も人を得て初めて名案です。ナマジ、大勢に仰しやると、反つて行われぬ基です。

◎ソウデスカナ、夫では、研究が出來ましたら、少數の人に申ませう。

續海舟餘波（六）

◎瓦解城渡しの時は、滿城皆な大不平、大反對であつて、晝も夜も、內も外も、皆な海舟先生の邪魔をするもの斗りであつたと形容しても宜しい程である。此事稍や落付ば、兵隊の脫走、上野彰義隊の亂、榎本等の軍艦逸走など、續々虛日なく、只だ先生を苦しむるのみであつた。此等は、通常、人の往々承知して居ることであるが、奧羽諸藩の連合と、熊本士人の陰謀とが、つまり先生の一縱一擒で事なく濟み、明治新政府の最初の治安を一と先づ取りとめたとは、餘り人の聞かぬとである。よつて先づ其の熊本士人に關する大畧の事も先生の談話を筆記し置たるものによつて示す。（以下筆記禁轉載）

◎安場はナ、初は每日の樣に來たものだが、其后、ワシを不信用にして居るから、直に行つて、そう言つて會ふ方が善いよ。ナニ、古莊の事からサ。

◎古莊が、ワシの所へ逃げて來て賴んだのサ。何んでも、コモを冠つた、キタない男がお目にかゝりたいと云ふと云ふから、通して見ると、古莊サ。古莊の言ふには、「私は、アナタの敵で御座い舛、然し、なまじなものにつかまるよりは、もしあなたが捕へよふとなさるならば、縛つて出して下さい、もしかくまつて下さるならば、かくまつて下さい、アナタに直にお話した方が善いと思ひましたから、出て來ました」と言ふのサ。ワシは大相賞めてやつた。『それ丈の大膽があ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

れば善い、然し、人をかくまふと云ふとは、之まで仕なかつたのだから、どふも仕にくいが、靜岡の繩張内にお出なさるならば、必らず外へもらしはしません、就ては、金は私から出しますから、私の言ふ所へ行つて居なさい』と云ふと、古莊は、懷から二百兩出して見せたよ。「イヱ、その御心配は入りません、逃げます時に、家内が呉ました。金はありますから」と言つたよ、

◎あの家内と云ふものは、大したものだよ。鬼の女房に鬼神とでも云ふものだらふ。頭に髮の毛が一本も無いよ。ダが、い丶女だ。

◎何でも、古莊がつかまらふとする時に、手水場に逃げ込んだそうな。スルト「大層たまりましたから、汲出します、御覽なすつて下さい」と云つて、汲出したから、くさくつて、役人が皆な鼻をつまんで逃げた。其の間に古莊をにがしたと云ふとだ。

◎古莊は、夫から山岡の所へやつて、米つきをさせたよ。二年ほど。

◎その時子、安場などが、熊本藩の御用だと言つて、出て來て、古莊をさがしに來た。「蹤跡を尋ねました所が、靜岡迄、來たと云ふ跡がつきましたから」、と言ふから、ワシがだましてやつた。『イーヤ、夫は、そうでなからふ、アレはワシの敵だから、コチラに來る氣遣ひはない、何でも朝鮮へ行つたらふと思ふ』と言ふと。『成程、左樣で御座いませう』と言つて、還つて行つた。ダモノだから、安場は、其後折々來は來るが、大そう心を置いて、氣を許さぬやうになつたよ。

◎古莊等は、川上玄哉等の仲間サ。東北連合は、實に彼等の謀畧サ。「いよ〳〵連合も出來ました」と言つて歸りに來たから、善く分つたよ。川上が玄德で、古莊が關羽、竹添が孔明サ。古莊は、熊本藩の土橋の訓練隊長だから、之を用いんければ何も出來んので、川上が使つたのサ。東北は少なくも二年位は持つと思つて居たのよ。スルト、薩長が力を盡してあちらに向ふから、其の虛に乘じて、大坂に打て出で、糧道を絕ち、西京の天子を抱くと云ふ趣向だつた。あの當時、あれ丈の計畫をしたのは、あの仲間ばかしだつたよ。

◎川上と云ふものは、夫はひどい奴サ。コワクテ〳〵ならなかつたよ。たとへば、斯ふ話して居てサ「岩本と云ふものは

野心がある」など云ふ話が出ると、「ハヽア、そうですか」などと空嘯ふいて、とぼけて居るが、其日すぐと切つて仕舞ふ。そして、あくる日は、例の如く、チヤーンとして、すまして來て、少しも變はらない。喜怒色に形はれずダヨ。あまり多く殺すから、或日、ワシはさう言ッた、『あなたの樣に多く殺しては、實に可哀相ではありませんか』と言ふと、「ハハア、あなたは、御存じですか」と言ふから、『夫々、分つて居ます』と言ふと、落付拂つてね、「それは、あなた、いけません、あなたの畑に作つた茄子でも、黄瓜でも、どうなさいます、善い加減の所に、ちぎつて、澤庵にでもをつけなさるでせう。アイツ等は、夫と同じとです。どうせ、あれとれと言ふて聞かせては、ダメデス。早くちぎつて仕舞ふのが一番です。アイツ等を幾ら殺したからと言つて、何でもありません」と言ふのよ。己はサウ言つた『あなたは、ソウ無雑作に人を殺すのだから、或は己なども、ねらはれるとがあらふから、ソウ言つて置きますが、だまつて殺されては困るから、ソンナ時には、左樣言つて下さい、尋常に勝負しませう』と言ふとネ、「ハハアー、御じようだん斗りッ」と言つて、笑ふのさ。仕末にいけやしない。竹添などに、ソウ話すとネ、少しも信じないよ。「アナタは、左樣仰しやるけど、そう云ふ人物ではありません」テッテ、少しも疑はない。夫はひどひ人間だつたよ。

◎徳川の臣に至ては、夫は實に小さなものサ。ミンナ、三河武士の遺傳で、誰も忠義と云ふ區域から脱け出したものは無いよ。此后でも、誰一人、明治政府に、復讎しやふと云ふものはないよ。夫は、安心なものサ。

◎夫でネ、古荘は、今でも、さう言ふそうな。ワシが大嫌いサ。「勝サンは大嫌ひだけれども、二三度、首をつがれたから、何とも言へない」と言ふそうな。此間も來たが、縣令（知事の事）になつてるそうなが、「ナーニ、縣令などは、譯はありません」と、さう言つて居た。熊本では、先づ、アレが第一サ

◎ソレデ、靜岡から、ワシが來るときネ、仕方が無いので、大久保に相談した。「コウ〳〵云ふものがあるが、どうか助けて置たいが、自首させたらとも思ふが、どうでせう」と言ふと、夫が善からふと言ふので、さうさせて、二年ほど圍つて置いた。

◎スルト、熊本の騒ぎで、大久保があちらに行くとき、「勝サン、誰か使ふものが無らふか」と言ふから、『夫には善い者を圍つて置きました。古荘デス』と云ふと、「夫なら、アナタから手紙を書てくれ」と言ふから、ワシは書いてやつた。『お前は、もしモ一度騒ぎたいならば、此際、出て騒げ、もし又大久保と一處にやる氣ならば、一つやつて見たらば、ドウカ』と言ふと、大きに喜こんで、用ひられよふと言ふのサ。ソコデ、大久保は直に出して、大藏の二等官に用ひた。サスガ、大久保だから、少しも差圖しない、「お前に任す」と言つて、放任したから、古荘は一生懸命で、働らいて、とう〳〵片付たよ。

◎竹添カエ。あれもサ、大久保が支那に行くときに、「勝サン、誰かなからふか」と言ふから、『夫には善い漢學者が取つて置てあります』と言つて、あれをすゝめたら、大久保も大層喜こんで用いたよ。夫があれの立身のはじめサ。今でもサ、竹添がワシをやりこめるとサ、ワシがそう言つてやるのサ。『お前の孔明も知れたものだ、ワシの方が智慧が上だから、モウ孔明はおよし』と言ふと、大邊に弱るよ。今ジヤア、あんなに仙人のよふになつて仕舞つた。本を澤山もつて居るが、夫は學者だよ。(禁轉載)

海外に行く日本人の誤謬

◎追々海外に出掛る人が殖へるが、其の出掛る時の心得に、一つ誤まりがある。之は、日本人の癖で、甚はだ善くない。此の癖を去らんければ、迚も無益だ。海外で十分の仕事を爲るヿも出來ぬ。日本が、海外に向つて遠大な仕事を續けるヿは出來ぬ。

◎夫を、何乎と云ふと、出掛ける時に、夫婦同伴して行くと云ふ心掛の無いヿである。之は、西洋人などゝ、丸るで違う。眞とに、不思議なほど違つて居る。

◎西洋人などが、外國へ出掛るには、是非、妻君を同伴する妻君と離れるのは、例外の事で、一處にゆくのが通例の事になつて居る。妻君と少し離れても仕事が出來ぬやうに思つても居り、又、言做はせて居る。「家内が居ないので、何も出來ぬ」などと言ふヿは、當り前の世辭であるが、日本人など

が、ウッカリ、ソンナ事を云ふと、「コノ野郎、よつぽど御座つてる、グータラ坊だ」などと、人が馬鹿にする。夫丈け、習慣が違つてゐる。

◎それなら、日本人の海外に出掛ける時は、如何なる心持かと言ふに、丸るで、イクサにでも行く様な風で、生命がけと云ふ見幕である。其の熱心は多少感心ではあるが、餘り大事に思ひ過て、ちと可笑しいやうである。ナゼ、ソンナニ初めから力こぶを入れる乎。力こぶも善いが、初めから、あんまりソウすると肩が凝りすぎて、迚も長くは續かぬものである。元來、平氣な、當り前の考でなく、丸るで非常の事業に當りでもするかの如く、鬼が島に敵打にでもゆく躰裁で出掛るから、妻子を連れてゆくと云ふ考が少しも起らぬのである。之が、抑そも間違ひの初である。

◎恰かも、出稼か、戰爭かと云ふ心持でゆくから、其處に腰が据らず。又、先方の家庭とも交際せず。ホンノ、製造場の職工の様な關係で、たゞ働らく丈け働き、早く本國に歸らふと云ふ心持であるから、仕事も本當には運ばず、その仕事も亦た長持がせぬのである。

◎どふか、海外に行くのを、お隣にゆく様に思つて、餘り、仰山に考へず。隨がつて、是非、妻子は連れて行くものと、初めから目算の中に置く様な風にならせたいのである。又、妻君も、「よく留守をした」などと云ふとを名譽にせず、一處に行つて助けるとの出來ぬやうでは、力のない妻君と見へる」と言ふやうにしたい。コンナ事は、些細な事の樣に見へるが、實は、國民の氣風、國家の事業に大關係を及ぼす至大の原因たるものである。

日本公使館領事館の妻子

◎前と同じ道理、否な一層適切な道理で、公使館や領事館にある日本の在外使臣の方々は、是非とも、妻子を連れて行かれねばならぬ。たゞ、夫に困られるのが、入費である。

◎妻君の洋服、身のまわり、粧飾品の入費は固より、妻君か居れは交際の仕方か違つて來て、莫大の入目か掛る。夫に恐れて、外國に連れてゆく人か少ないのである。

◎西洋在外使臣の婦人は、同じ服裝だから、外國にゆくとな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つたから、丸るで新たに衣服を調へると云ふものでない。指環にせよ、腕かざりにせよ、頭のものにせよ、若い時から持て居るものもあり、又、親類から貰ふても出來る。日本の樣に何もかも新調するヿは、大に相違して居る。

◎日本では、洋服の下着から抑そも新調せねば成らぬ。何もかも新調である。然るに、妻君携帶の爲に出る手當と云つては、眞とに少額なもので、迚も話にならぬヿである。一躰、日本の在外使臣は、皆な手當が少ない。其の交際費も、實にケチなヿであるが、夫人同伴の上から見ると、一層憫れなヿである。

◎夫故、在外使臣の手當を大いに增すと云ふヿは、實に急務であるが、差當り、夫人携帶の爲に特別に支給する分をズット、氣張るやうにしたい。コンナ事に、ケチな儉約をするのは、實は損である。公使、領事を遣らぬならば善いが、遣つて見じめな、見すぼらしいヿをさせるのは、誰の恥である乎と云ふに、皆な日本人の恥である。已むを得ずんば、二三ケ所づゝ兼させても仕方が無い。氣張るべき所には十分氣張つて、躰面を辱かしめぬヿと、國權を主張するヿに、不足の無いよふにさせたい。凡そ昔しから、士らいの覺悟と云ふものは、家では年中茶づけを食つても宜しい、外に使に出したもの丈けは、毫もヒケを取らぬ丈けに立派にさせたいと云ふヿである。

學生夏休の壯遊

◎學校の夏休と云ふヿは、西洋の風で、日本の學者には無つたヿです。學問するものに、五六十日の休があらう筈はない西洋でも、たゞ休むと云ふ主意ではないのであるが、詰らないヿ斗り眞似をして、馬鹿々々しいヿです。

◎夏休とは、學校が休みと云ふ丈で、學問の休と云ふヿでは、勿論ない。ナゼ、學校が休むかと云へば、所々に出て行つて實地研究をするに都合の好い時であるから、ソウするので、もと〳〵惰けさせよふとする主意ではない。

◎夏は旅行するに都合が好い。日も長く、着る物も入ず。万事開放 繁茂の時節で、天地山川すら胸襟を開てくれる時である。出かけて行て實地に踏査、研究するに、至極の時デス。

◎先づ、故郷に歸るか、親類の田舎廻をするか、地方に旅行するか、汽船に乘て貰つて、上海、基隆、孟買の邊へでも、出掛るか。夫々の都合に隨つて、壯遊を試みるが宜しい。

◎女はまだ夫程の事は仕悪くい。然し、故郷に歸つて、家庭の内で實地研究をするか、其地方の主婦、老夫人、經驗ある人々を訪問することなどは、誰でも出來る。海邊でも、山中でも、夫々、採集して、他日、生物學の研究材料に用いることは、至極面白い。地理、歷史の實地研究も出來る。物産、工業に關する實地の調べも多少は出來る。今の女學生にしても、容易に出來る研究法は幾つもある。

◎シカシ、夏休は、休だと思つて、ゴロ／＼寢る癖をつけると、躰はいよ／＼だるくなり、頭はいよ／＼重くなり、いつでも眠が足らぬやうな心持がして、夏休中に驚ろく程、不性の習慣をつける。秋に入つて當分、は反つて勉學が出來ぬやうな風になる。之では、休んだが爲めに勞れるので、此上もない馬鹿なことである。

◎一躰、老人や病人にあらざる以上、年若のもので、勉强ざかりの血氣な人などは、「遊ぶだの」、「休むだの」と云ふことは、

別段必要が無いので、ソンナ事は、あまり可云ゆる文明流と云ふものを眞似ぬ方が善い。學問をするものに取ての、「遊」と云ふは、「氣を轉ずる」と云ふことで、「休む」と云は、「夜、寢る」と云ふことだと思つて居れば宜しい。其外に別段、空な時間を使わんで宜しいことであらふ。

◎武田信玄の兵法に、「遊の術」と云ふがある。之は、軍を轉じて、出沒變轉極まりないやうにする工夫であるが、學生の身に取つて「遊」の一字は、どふか此の意味にしたい。たゞ心持を轉換して、いやな鬱陶しい氣にならぬやうに、新鮮に、活潑に、次々の新らしい題目に腦を使つてゆくよふにすれば宜しいのである。

◎休むと云ふことも亦た同様で、太陽は赫々として輝り、草木は緑々として茂り、水は咽び、笑ひ、踏つて、快奔しつゝある此の夏の眞晝間に、ブラ／＼して休んで居ると云ふは、實に恥かしいことである。寧ろ、月は落ち、草は眠り、露の夢を結んで、星の銀の留針でとめた、夜の黒い幕が靜かに覆ひかかる間だ丈け、安眠して休むのであると心得る樣にしたい。若い者の夏休み呼はりは、太はだ見悪いことである。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女心理學 恥の文學

(其二)

無識菴東根

●●●●●●●恥情の起る理由――吾人は何故に恥かしき情を起すや余の見によれば、左の三因より來るが如し。

(一)、人又は事物に慣れざる爲め、多少恐るゝ情あり。

(二)、失策、欠點又は醜態を知られしやの疑念ある爲め也。

(三)、天性的に發するもの、即ち自然の情なり。

(一)の場合は小兒の家族員間には、遠慮なく爲すとも、他人の入り來れば之を止めて爲すことなく、又は通常吾人が未だ經驗せざる事に手出するを躊躇する如き時に見ることを得べし。(二)の場合は(一)と連絡して慣れさる爲め更らに疑念の加はり、夫れか爲めに失策、欠點等を見知らるゝと心苦しき時に見るべく(三)の場合は、重もに男女間の關係に生ずる所にして、慣れずして恐れ又疑ふ等の外、一種先天的の情生じ來るを見るなり。今之を事實に徵すれば、下婢なんどの不知不識眠氣を催ふし白河夜船を漕ぐと暫時にして、不圖目醒めたる時に傍に、家人の在る如き場合は、己が居眠りせる間の醜態を見知られたるやを疑ひ、氣恥かしくなるものとす。又、鳥なき里の蝙蝠の如く、未知者に對し滔々として自己の力量經歷學識等に就て、誇り顏に物語れる折、最も能く自己の生涯を知れる長者又は友人の突然入り來りて、「エライ氣焰ですな」抔、云はれんたらんには、必ずや之れ自己の大法螺の立聞きせられしやあらんとの疑念と恐怖と起りて、裏恥かしき心地すべし。又、男子許りの多衆なる所に女子一二人、女子許りの多衆なる所に男子一二人在合はす場合の如き時は、少數なる自己等に視線の集りて批評の料となり、多少の失策、欠點も異性の多衆に見知られざるやとの疑念起りて、氣恥しくなるべし。又、學業試驗等にて落第する時は、自己の力量の不足は、已に多衆に知られたりとの事より恥かしさ限りなきに至る。而して男女間の事は、必ずしも慣るゝ、恐るゝとの事に非ずして、一種妙なる事實より恥かしき情を生ずるが如し。其「一種妙」なる中には、種々の要素ありと雖も、要するに已に異性なれば、先天的に自然湧出づるものと云ふべ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

きなり。

恥情の進化――小兒生れて十ヶ月乃至十二三ヶ月にして、母又は乳母、子守等より「オツムテン／＼」「カヘグリ／＼」「アワ／＼」「チヤン／＼」等の藝を習ひ始め、之を覺ゆれば小兒は母、乳母等の前に於て平然之を行ふも、父親の前に出づれば容易に之を行はず、况んや他人の前に於てをや。之れ小兒生後十ヶ月位より已に恥づる情の起れる證なり。小兒の非社交的にて他人に臆する質のものは、恥情の多きにて、社交的に何人にも抱かれ平然たる如きは、恥情の少なきものと云ふべし。漸次成長して三十歳前後に至るまで通例此情の起伏を認むることを得、壯年より老年に至りて漸次減少するを常とするなり。

恥情と年齢、男女――男よりは女の恥情深し、之れ日常實見する所にして珍とするに足らず、而して男女共に恥情の盛んに起るは、性慾の發してより結婚するまでの時期を最上とす其以前は性慾の何たるを知らず、故に無遠慮なく、無作法なり、求むる所なし、無邪氣なり、されば多少の恥性存ずるも戀愛、性慾上に何等の關係なければ、其消息は頗る簡單なるものなり。其以後即ち既婚すれば人生恥情の八分通りは、已に消失したるものと云ふべし。但し結婚當座は、其二人者の間に起る恥情は最極點に達するも、日月と共に減少し去り、遂に他人に對する時に當りても恥情少なきに至る、即ち未だ少にして性慾を知らざりし時と殆んど同じく、求むる所なく、遠慮少なく、作法漸く壞れ、素より邪氣少なし。故に年齢よりすれば、恥情の成長は、十三四歳より漸次に增加して三十歳前後に至ると云つて可ならん。年老いては洒然として悟り何事も恥ぢざるに至る。之を以て思ふ、恥情は戀愛性慾と消長するものにして、戀愛性慾を達するによりて漸次減少すと。然らば未婚者、少壯年には多く、幼年者、既婚者、及老年者に少なきは當然なり。但し性慾とのみ關係するに非ることは、前項三種の場合を描きたるによりて知るべし。

恥情と教育習慣及境遇――恥情は無教育者に少なくして、有教育者に多し。前者は恥づべき事を知ること少なく、後者は之に反すればなり、但し教育を正當に受くれば恥づべきことと恥づべからざることを辨知して、平常其恥かしき事を避くるの手段を有すれば、一見して少なきが如きも實は然らず、蓋し

神經過敏にして能く之を悟り得るの能力あれば、些々たる事にも多少の恥情存するなり、之れ即ち廉恥心にして、德義上極めて必要の素をなすものと云ふべし。然り敎育は廉恥心を增長せしむる丈け、從て恥情を德義的に變形するなり。又習慣より見れば重もに家庭、朋友等の勢力如何によるものなれば、良家の良習に養成せらるれば、恥情多きを致すと云つて可なり。田舍に於て親子兄弟相共に勞働する時に於て、互に淫猥醜態の小唄を歌ふて恥ぢず、往還の眞中に於て、子守、若者等の猥褻の放歌を爲して通行する如き、彼等には是等に對する恥情生ぜざるが爲めならざるを得ず、商人社會に入れば藝娼妓に戲るゝを顧みさるに至り、職人社會に入れば醜態を暴露して厭はざるに至り、夫婦道なく慣れ過ぐれば、結婚當座の恥情同處にか去り、醜事惡行を爲すと重なり來れば平然となり、男女の交際頻繁なれば、性慾的關係の容易に起らざるに至り、屢々惡事醜行を見聞すれば、些の刺激なきに至るの類、凡て是れ習慣より恥情を減少する者なり。されば境遇の撰擇は、道義を高むるの第一着步と稱せざるべからず。恥情と道義との關係たる此の如く密切にして、恥なきは戀なく、戀なきは德なく、德なきは道なく、道なきは亂なり。

恥情と公正──恥態には可憐なると氣の毒なるとの二別あり、少女の何とはなしに顏を赤むる如きは可憐にして、所謂恥を搔きて恥かしき態は、見る者をして氣の毒に堪へざらしむ。又恥情は時に公明正大を缺き、勇氣なきを表することあり。「天地に俯仰して我輩何の恥づる所なし」と云へば、心中毫も疚ましき所なく極めて公明正大なるを表し、臆病にして遠慮深く、事業に當りて躊躇する際の如き、「何の恥かしきとか存する、堂々打つて出づる亦可ならずや」と云ふ故に此場合の恥情は勇氣なきの證となるなり。婦人の如き恥情を存せざれば、實に厭やらしきもの、而かも恥情多きは臆病、無勇等を意味するとあれば、時所位に應じて、適宜なるを要す。概して餘りに恥かしげなれば、人をして却て苦ましむ、又餘りに恥なきは所謂鐵面皮にして人間たるの資格を缺くもの、中庸を得ると亦難い哉。

恥情の表出──恥かしき時は、概して下打向きて顏を下ぐるなり、瞼は紅を呈し、目は細く、婦人の如き多くは袖を以て顏を掩ひ多少の微笑あり。若し夫れ恥かしいやら、悲しいや

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ら、一層嬉しいやらの境遇は、愛情問題に連續するを通例とす。要之、恥情は人性必然に生ずるもの、究め來らば趣味多き問題にして、之を文學上、社會上より論ずる尙一層の妙ありと雖も、冗長の文字を並ぶるも何となく氣恥かしければ先は斯に擱筆すると爾云。

妻の不平

再嫁のやもめ　某女（投）

◉皆さまの御述懷を承わるにつけ、恥かしき物思ひを記して、せめての心やりとし、二つには、後の方々の戒しめともなさばやと、左に、おぼつかなくも認たむ。

◉妾わは、曾て一と度び他家に緣づきしものに侍る。其時たび〳〵の出來事ありて、穩やかならず暮しつる內に、ふとして連れ合ひに先だたれ、初めて我に反りて世の定めなきにかこち、一生斯くぞと決心して數年を過すうちは、兄と、叔母も、其ままに容してくれられしが、又々思はぬ勸めにふと乘りて遂に再たび只今の所ろにかしづくとはなり侍りき。

◉前なると、今のと、そのお二人を較べて言わんなどは、愼しみなき行に似たれど、何れにせよ、我身の不束にて、不足不滿の絕えぬ我儘の故と覺りては、せめて他樣の心氣付となさばやとする所存なれば、いつそ、ありのままに記さん方、當然ならめ。其の心して、許し玉へ。

◉前なる御方は、癎癖つよく、屢ば無理と思ふ事を仰せられて、一時は里に還さるることもあり。生計も自由ならぬに、分外の奢りを爲し、先の考もなく、ふと散財せらるるとなどありて、いつも〳〵苦勞は絕えざりし。之に較べては、今の方は、キマリもよく、學問もあり、世の受も宜しく、万事、大まかに放任して頓着せられぬ方なれば、兄や叔母より見玉ひては、非常の相違と思し召し、妾が初めて安心せしならんと想像せらるる程なるに、吾が內心の感情、實際全く反對なるは、何故に候やらん。

◉當時の其時は、苦しくも、忌とも、又腹立しくも思ひ候ひき。餘りと云へば無理の御言葉と、万事を忘れて激昂せしともありしが、一時の癎癪破發して、思ふ存分のひどい事を仰せられしあとは、雷雨の后の晴天の如く、それは〳〵潔白にて、又、御自身前の言ひ過ぎを悔ひ玉ふ如く、恥かしきほどの御信切にて、我慢にも我等の出來ぬほどの優しき御取

扱あるが常例なれば、之にて何もかも忘却し、溶くる如き御情懐に滿足して、腹立つ事多きほど、後にて、うれしきヿも亦多く、變化多ければ貧乏も苦にならぬものか、ツイ其樣なるヿをして多くの年を浮かと過し侍りき。今より追懷すれば、何もかもゆかしきヿに侍る。

◉此時の事に較ぶれば、今は極樂と申しても善き筈にて、召し使も多く、手づから骨折るヿは少なく、經濟の心配とてはなく、前途の望はあり、良人は、世にたてられて、羨やむ人少なからず、大抵の事は妾の自由に任せられて、少しも御無理と思ふヿはなきに、何となく只だ一つ欠乏して、いつも心にあき足らず、斯く思ふは、我身の我儘ぞと知りて、自から叱る樣にすれど、不思議にも、前年の叱られては又あやまられ、無理を言はれては又やさしくされ、貧乏の中にて一所にやりくりを相談し、ふと手に入りし收入を喜こびて、存外の一日の遊山せしヿなどを思ひ出しては、今の我身が何となく死んだ樣に思はれ、餘り變りがなく、餘り放任せらるゝが面白くなく、いつそ今少し無理を言はれて、今少し干涉されたい樣に思ふヿの度々なるは、申迄もなく、我儘にて侍る、我儘には相違なけれど、さて心の滿足せぬは、いかにも隱すヿの出來ぬものにて侍る。

◉何が不足ぞや、何に不滿足ぞやと、時々は我自から我心に問ふヿのある程なれど、其の理由は、自分にも知れがたし。たゞ喩へて申さば、冷水もよく、熱湯もよけれど、ぬるま湯は好かず、快晴もよく、暴雨も心地よけれど、ムシ〳〵したる曇天の忌なると、ほゞ同樣の心持にてや候はんか。

◉如何なれば、ふと再緣は爲しやらん。「女は若い中には一人くらすほどの氣性も立てれど、年老ひてから心細きものぞ、其時となりては、最早、致方はなきものぞ」と、年たけし經驗ある人の言葉何となく威力ありて、扨は、ソンナものかとふと驚ろきたる心より、一時思ひ返したるなれど、畢竟は、行末を案じ過して、自から卑怯にありし故と思ひ侍る。世も違ひ人も樣々のものゆへ、たゞ一概に老人の經驗說を信ずるは、宜しからぬものにはあらずやと、今は考へ侍る。

◉先立ちし方の御墓に參ゐるが今は唯一の慰さめなれど、兄にも叔母にも、もとより今の方にも秘して爲るヿなり。何となく、うしろぐらき心地するヿを爲すにて、疚しき思のする

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ことなるが、去りとて不貞とは信じ侍らず、たゞ隠して爲る樣なることにて心やりとせねばならぬかと、我身の忌になり候。

◉あわれ、女は情けなきものに候。容易すく思はじとするものを思はせられて、最早取返しのつかぬ折もあり。早やく忘れんとしても忘れられぬものを、無理に忘れよと強ひられ、忘れしつもりにて他の義務を負へど、中々に忘れられず、夫にては、不貞なりと驚ろかさるゝこともあり。如何なる苦勞をも辭せじとは覺悟いたし居れど、我思ばかり自由ならぬことのあるは、哀れなるものに侍る。

◉女の再縁はなされぬ方宜しく候。もし何の方に全く心を捧ぐるやうになれば、夫は心安くもあらんかと思へど、さりとて又寢ざめの悪しきには候はずや。失念術と云ふもの行はれて、すべて前の事を忘るゝことの出來なんには別とし、女には全たく忘るゝと云ふことは難きものに侍る。

◉女は再縁すべきものにあらずナドと、人の大業に定めて束縛せらるゝは、如何にも心得ず。斯る情理は、他人より壓制して定めらるゝものにあらじ。然し乍ら、吾より自由に考へて、再縁せぬことそ、ゆかしくも、樂しくも、安らかにもあるものなれと、思ひ侍る。

◉斯る心をもてる今の妾を妻となし玉ふ方のお氣の毒にて、いつそ自から決して如何にか爲すべき筈にはあらずやと迄で思ひ迫まることの候へど、亦た疑ふよしもありて、其まゝに暮し侍る。あはれ、教をたまへかし。

家庭の死別（二樣の事實）

生別も苦しけれど、死別は更に苦し。死して万事休すなど思はせし人あるによりて、いよ／＼苦し。否な／＼死は万事を休むものにあらず。精靈不滅、相思盡きざるものを、人の魂しひの土芥三杯の塵に化したる外、一物なきに至らんとは、思ひ濟ますことの出來ざることなり。然し、永久には滅せずとするも、眼前には復た見がたく、朝夕同もに住ひし人の、夢の消ゆる如く、幻の散る如くに失せゆきたる跡こそ、如何に心細き哉。一枚の齒、一片の爪も、有るときは忘れ居れど、少さか欠けても、其の不自由は莫大なるものを、春秋倘若く、前途倘多き可愛の人の、もがるるが如く、奪はるる如く、

取り去られし時の苦しみは如何なるべき。之を思へば、家内健全にして暮し居るは最大幸福なり。之を思へば、人々互ひに用心して躰を丈夫にするが第一なり。冷水も飲むべからず、不用生はすべからず。

茲に、左の二文を寄せらる。一は、其の愛子を失ひし人、他は其の従妹を失はれし人の文にて、同もに切めてもの慰さみ特とに書き越されしもの也。讀者は必らず、同情を表せらるなるべし。同じ經歷の方は、同もに泣かるゝならん、未だ此の不幸なき方は、感謝せらるゝならん。此の文の筆者は、同情を得て、眼こをうるまさるゝならん。同眼同涙。情思さまく／＼ならん。

○逝きし我兒を懷ふ　　在臺灣　某

ア、我兒は遂に逝きぬ、最愛なる其父と母とを跡にして遂に去りぬ、時は維れ明治三十二年三月廿八日、世に在りしと七ケ月、日を數ふれば百八十八日

此兒は我等か第一子にして、昨三十一年九月廿一日午前一時臺南に於て其初聲を揚げぬ、見れは愛らしき男兒なりき、我は言ふ所あらさるも心何となく嬉しかりぬ、産める母は其苦を忘れて更に喜びけり。夫れ釣落したる魚は大きく、先だちし子は賢しと思ふは抑も人情の弱點か、左しも我兒は我等の子としては不似合に美しかりき、其髮は最と濃く、其顏は圓く、其眼は又實に大きかりき、其スヤ／＼と睡りたる樣は我等と我等の友人をして、天の使の如しと云はしめぬ、ア、是れ遂に使として短き生命を了へぬ。彼イツモ已に其使命を全ふせしものなるや

誰しも同しとなるへけれども、我等は此兒の將來に對して實に限りなき望を抱きたりき、其立身出世に、就て、其爲さん事業に就て、扨ては之を見て、我等か受くへき喜に付て、夕食の後なぞ二人語り合ふて樂みぬ

彼は往頃より甚た能く笑ひぬ、彼は其父母を茫漠に覺知したりしが如し、殊に余か驚きしは、余の近くに住する人々は、余と同色の服を着せる人ありしか、兒は之を見て躰を回らせしも、顧みさりしかは、聲を揚げて哭きしとあり、何物にあれ取らんとするときは、手よりも寧ろ口を出しぬ、或る牧師か來りて敎を說き、讃美歌を歌ふときなど、頻りに之に對し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、「ギョー」「ギョー」と答へぬ。此聲と笑とは兒が物に感して發する聲なりき。過日勝伯逝きて、國民新聞は附錄として其像を石版刷にして出しぬ、余は之を障子の裏に張り置きしに、兒は之を見る度毎に頻りに「ギョー」「ギョー」と之に言ふ如き樣を爲しぬ。又鏡を見しときの如き、頗る喜び、近つきて見、言ひ、之を取去れば哭きぬ。其尤も早く覺へしは、其母が乳房を與ふとき「乳チャンナ」と云ふ聲なりき、之を聞けば、兒は直ちに頭を動して、乳房を探りぬ。手足身躰滿〻として肥へ、抱くことも二十分以上は、余も堪ゆること能はざりき。ア、此兒は遂に逝きぬ、今は遂に逝きぬ。加賀の千代女は其愛兒を失ひて歌ひけり

　とんぼつり今日はどこまでいんだやら

彼の小き魂は其罪を知らざる儘に、今は夫れ何れの天にか遊ふ。靈魂不死の一言は今や余に取りて、一大緊急の問題とならぬ

其病に罹りしは三月二十二日正午近くにありき。余等は知れる限に於て、爲さんとを盡しぬ。二十五日臺南病院に移しぬ。廿七日避病院に移されぬ。廿八日午前九時三十分は、其最終の呼吸を爲せるときなりき。ア、此間の事余は記するに忍びす、余は遂に省略しぬ、ソモ苦悶する子を見る親心の切さよ。余が最終の守歌を歌ひしは、其死する四時間半前なりき、妻が最終の乳房を含ませしは、其死する三時間前なりき。ア、彼は逝きぬ、最愛なる父と母とを殘して彼は遂に逝きぬ。思へは乾坤爲めに暗く、呼吸も閉がる心地す

　死して行く子を送りけり血の涙

○從妹を哭す

知津子

散る花の憂は蕾の中に潜み消ゆる露の哀は夕の叢に結べり熟ら其生死榮枯する所以を觀すれば雜然たる萬象何ぞ一に果敢なさの限なるや

嗚呼從妹よ死の手一たび汝の袖を捉へて如月の空に奪ひ去りしより茲に三閱月春の名殘夢の如く過ぎ去りて百鳥の聲徒らに青葉の陰に聒ひすらく庭の藤波幾返りの卯月を粧へさもまこさを語るべき彼女の消息は長へに絕えたりあゝ優しかりし彼女の姿今何處にありや蟲りなき彼女の魂將た那邊にか飛へる有明の心無情くして曉の聲藥末の眠を驚かせしが抑も又花守の爲其力及ばすして行く水の波の上に迷ひ出てしが

余が家信によりて彼女の病狀を耳にすることを得たるは去年の水無月なりしが寂しき夜半なし臥わびて鳩の如き彼女の胸何如に屢々人知れぬ淚に濡ひつゝあるかを思ふ每に余は切に神の御前に求めたり

文月の初つかた余は故鄕に歸りし折急ぎ彼女の家を訪れて曾て愛らしく肉つきたりし其面の今は瘠せ衰へて不言の憂を包める樣を見て如何に烈く胸さはきせしよ八十路餘りの祖母の君老の身の疲れも忘れて明暮れ彼女の枕邊に看さりし給ふ

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

を聞きて余は戀さに得堪へさりき

然るに余の境遇は久しく故郷に留りて彼女の愛を慰むること叶はず僅々数日を出てすして復ひ旅路にさすらふこととはなりぬ

暫しの別れを告むとて出立の前日彼女許尋れしか嗚呼余は思はさりき此訪問こそ長へに彼女と相離るへき最後の面晤なりしならむとは嗚呼斯くとは夢にも思ひ掛けさりき想ふに亡き数に入りて彼女自らもまた案外なりしなるべし昨臘のことなりき久しく見ることを得さりし彼女の消息來りて何か諸禮に關はる書物あらば送りてよと言ひ越しぬ余は其中に

（前略）私病氣中は毎度御尋被下難有御禮申上候此頃はよほど全快に赴き居候間重れて御安慮被下度候（中略）私未だ仕事致すこと叶はす炬燵計りも退屈に候へば氣晴しに書物を見れは宜敷と存候へは右にまさりたる書物候へは御送り被下度候（中略）亂筆御高免被下度候私病氣に就きてより此手紙認め初めに候へは手ふるひ甚た見苦敷候へとも御判し御讀分被下度候云々

とあるを見て其病勢の甚た怠れるを知り中心怡悦の情に堪へすやかて諸禮大全といふを購ひ之と共に慰めの数々返り事しつ尚此上の御惠彼女の上に豊かならむことを熱禱したり

されども悲かなこともまた暫しの空頼みにて其の喜はしき音つれと見えしは却々に涙の紀念となりにけり

越えて今年二月十四日不意に從弟より姉上の死去せるよし急報し來りぬ其報する所によれは二月下旬迄は日を追ふて輕快に赴きつゝありけるか廿七八日頃より病勢頓に革まり頭痛の甚しき爲め若者兩三名捻り通しなりしか十有餘日の間苦痛に苦痛を重れて終に溘焉起さゝるに至りぬと時に二月十一日午後八時春秋僅に廿有一

彼女の怜悧なる性質と從順なる素行とは彼女の兩親弟妹をして一層痛惜の情を切ならしめ久しく看護の勞を助け給ひし祖母の君か老朽の人徒に生き殘りてまだうら若き愛孫を先立しこそ返す／＼も怨なれとて咽せ入り給ひしといふも實に理なれや

嗚呼人の生れ死することは何時の頃よりか其端を開ける其生るゝや其因漠として既に知る可からす其死する抑も亦如何なる理ぞ深慈呱々の聲其父母の耳に美しきも三寸息絶ゆれば墓頭の冷露空しく骨肉の袂を濡すに過ぎさるに非すや夫れ人情の極致は歸する所至誠相憐にあり即ち其喜や愛の美にして其悲亦愛の現世されども人世の紛々たる　神意玄妙にして容易に之を測るべからす其生の喜や生者其人の喜に非す其死の悲やまた唯周圍の悲に外ならさる也嗚呼神よ余は爾か愛を吾人に與へて其生を樂ましめ給ふを謝す去されども何か故に愛を吾人に與へて死の悲を悲ましめ給ふや否神よ余は余か愛を有するか故に死者を悲むの苦しみあるを辭せす獨り如何ぞ靜淑可憐の小女を遇し給ふことの然く苛酷なるや爾の至仁至愛なる彼女の行末か祝して天の樂園にあることを許させ給ふらむされども何か故に死の門深く幽明の境を隔てゝ愛の囁きを拒むや

三月の末なりき余は歸省して彼女の新塚に詣でたりしか其墓側なる一本の彼岸櫻正に咲き亂れて限りなきの感慨を喚ひ起しぬ其薄紅の花瓣のさはらば消えなむさま亡き人の心の美はしきか如く片々として風なき空に舞ふ姿彼女の眼の清きに似たり拱手して靜にありし事どもを顧みれば嗚呼噫人生は夢幻の如き哉

あゝ從妹よ汝今何處にありや汝の死若し神愛の至意あらば余又何をか恨みむされども汝か遺せし誠心は深く余の腦裡に浸潤して遂に忘る可からす悲夫

あゝ從妹よたとひ湘江の水東流して還らさるも南山の萬木落ちて而て復た緑なり至誠にして若し幽冥に通ずることを得ば芳魂それ髣髴として來り余か胸に生きよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

古教新習（一）

山下石翁

吾、汝等に新らしき戒めを與へず」と、遠きユダヤの教祖は曰ひき。道に古今なく、義に東西なし、たゞ折々、所々の装ほひをかけて、戒しめの力を新たにするに外ならねば、惣じて、古き戒しめなりとて、一概に言ひけなさんは以ての外なり。茲に、昔しの女學にて朝夕言ひならわせたるとながら、今の女學生の全く忘れ居る條々少なからぬ中につき、當代に於て一樣に守りたきと思ふものを試みに列擧して示す、

一　大事なる辨まへなく、うちとけ人に語る事

二　正直にして衰ろへたる人を輕しむる事

三　衣類道具、おのれ美麗を盡し、召つかひ見ぐるしき事

四　我分際を知らず或は驕り或は不足の事

右條々常に心にかけらるべき事、珍らしからずといへども猶以て愼むべき事なり。

五　惣じて我善惡を知らんと思はゞ、夫の心おだやかならば、わが行善と思ふべし、忙しく短慮ならば我心正しからざると知るべし。

六　人を召仕ふ事、日月の草木國土を照し玉ふ如く、心を廻らし、其人々に隨がひて召仕ふべき事なり。

七　貴人の前にて扇つかふまじ、あせ拭ふまじ、かゆき所をもかくそあるまじ。もし堪ゑがたくば、そと手をやりつよくかきて二たび手をやらぬやうにあるべし。鼻かむとあるまじ。然れども、汗鼻などが出る時は、次へたちて、とく調のふべし。立れざる時ならば、隨分、こらへ玉ふべし、貴人の前に出る前に何事もとくと調へて出べし。

八　人前にて、爪とり、かみ撫でつけ、帶しなほしなどすべからず。人前にて、鼻かむ時は、下座の方をむきてかむべし。

九　人の小がたな、鋏など借りては、拭ひて返すべし、筆などつかひたる時は、あとをぬぐい、毛さきをよく直しおくべし。

十　人のねむしろ、ふとん、ゆめ〳〵ふむ可らず。まして人の足など、ふみ越などすると、吾子とてもすべからず。すべて、ふむものははき物、越ゆるものは、敷居より外はなしと心得べし。

讀史隨筆（一）

如雲學人

◎歷史の研究法には、色々の議論もあつて、中々緻密な說も行はれて居る。然し乍ら、何が歷史の材料となり、誰が歷史を書いた乎と云ふ問題から考へて見ると、少し馬鹿氣た感じが起るものである。今日で云ふと、人の評判が新聞紙の種になるが、新聞紙の記事ほど間違つて居るものはない、ちよいとした事でも、一つ二つの間違は必らずある。先づ此の樣な種が材料となつて、他日歷史に編製せられるのである。而して、如何なる人が歷史を編製する乎と云ふと、大抵、活世界の事實に當つた事の無い人か、ヒマ人か、第二流以下の人が作る方が多い、申さば紙上の研究、空論の統計に慣れた人が作るので、昔しから、第一流の實際手段ある人がワザ／＼歷史を作つたとは、餘り聞かぬ。

◎然るに實際の事と、書いた事とは、餘程、違ふもので、又、現場に經歷した時と、後から之を記載する時とは、丸で趣むきが違ふものである。中々、實際の消息と云ふものは、寫し惡くいものである。然るを況んや、大事大機の樞密なる出來事は、大抵、痕跡をかくしてあるものだから、其の表面に現われたる事柄を其まゝ信用しては、丸るで、ヌケ殻を捕まへた樣なものである。但だ彼の實事に達して、此邊の消息を看破る事の出來る人が、斯る表面の記載を透ふして眞相を窺ふので、夫が折々の卓拔なる史論ともなるものであるが、固より之を通常の歷史とは言へぬ。

◎左れば、歷史なるものの價ひは、此位のものと勘辨して、扨て此は活讀活用する工夫から讀んで見れば、如何にも面白いものであらふ。同じ人間を種とした記錄の事ゆへ、昔も今も、西も東も、同一徹の主意があつて、如何にも我が懷をさぐり、我胸を刺すよふな心持がして、千年以前の事も、掌の中の事の樣に思わるゝ塲合もあり、愉快禁じがたくなる。史を讀むの樂しみは、亦た格別である。

◎傳記は即わち一個人の爲めの歷史で、歷史は一國民の爲の傳記である。互ひに離れがたき關係のある、同じ樣なものである。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎傳記から歷史に入り、歷史から傳記に入り、互に相助けて考へねば、無論、勢の實相が分らぬ。個人が中心になつて社會を動かし、社會が包圍になつて個人を化成し、或ひは社會が樹木の根となり幹ともなり、個人が、其の芽となり、小根ともなり、本末先後の關係を持ち乍ら、同じ一躰に屬して居る工合を思へば、國民の歷史と、偉人の傳記とを別に離して見ることは出來ぬ。

◎昔し、蘇東坡は、毎度、一つの主意を提さげて、幾度か全史を通讀したと云ふことであるが、吾輩も折々之に倣つたことを仕て見る所が、此頃ふと感んずることがあつて其の通讀の際の隨感を、よい〱と書き留めて置いて他日の再考に供へたらば如何かと思ひ付き、隨讀隨筆して、左の如きものが出來た。固より、隨感で、研究したものではない、之から研究し樣と云ふものである。然し、同じ研究するならば、吾紙上の同人諸君のお考も乞ふたらばと思ふ所ろから、遂に編者と議つて追々掲載することを願つたのである。徂徠先生は、此類の草稿に「なるべし」と題せられたが、吾輩のは「ならん乎。如何」と云ふやうなものである。

文藝

案山子乃舍社中詠草

(案山子乃舍主人評點)

曉立秋　　よみ人しらず

、、あかつきの夢をさまして我窓の
芭蕉の廣葉あき風ぞふく

評。曉の寐ざめは感情の深きもの也亦秋風は他時の風と異なり其風勢に比べては樹間若くは戸障子の音事々しく凄ましきもの也芭蕉の葉は殊に風音の騒がしきもの也今騒がしき芭蕉の葉に音凄ましき秋風の立し故曉夢もさめたる也夢は自然にさめたるにあらずかゝる秋聲に驚きたれば苟も雅味を知るの人にして誰か幽趣を感ぜざらん

田家立秋　　近江　望月なを子

、、涼しくもはせのはしり穗見えそめて
あき風たちぬ小山田のさと

評。立秋の題を得ては直に風の身にしむさか悲しさか詠出すは例の机上古歌書の作例に依頼する保守派の常辭なるに反して此詠は田家天然の實景をよめり

折にふれて　　上野　和田久仁子

うまや橋利根の川霧こえしより
都に見ゆる秋のいろかな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評。今少しく熟せぬ所もあれどともかくも机上作例家の及ぶべき趣向にあらず

江邊立秋　京都　静間秀子

、、難波潟入江の蘆をふく風の
西にかはりて秋は來にけり

評。東風を春風とする如く西風を秋風とするは古來の例也上半既に秋景に適する場所を出し充分秋景の準備をなし置き下半殊に第四句にて一轉忽秋となり西にかはりての一句新珍也古の作例のみに泥む人は新句を得る中々遠し

新秋雨　伊豫　中谷信治

、、しら露もいまだこぼれぬ淺茅生に
秋のはじめのむら雨ぞふる

評。露の雅趣に於ける固有の時節は古來秋に定めたり歐米の詩人などは斯る區別は知らざるべきも和漢の氣候にては秋冷清朗の朝夜に露滋きのみならず草葉におく朝露など常よりは白く見ゆる也此上句は新秋の景を現はさん爲にかくいへり露は草原に多し早く秋景を認むるは野外の風と草原の露也而も其露すら未日にたゝぬ初秋に早や村雨ふりて秋景を呈したる雅趣掬すべき也

初秋蟲　京都　本部登子

、、夕月の影ほの暗き草の戶に
むしなきそめて秋は來にけり

評。初秋は舊七月初旬なれば月は未上弦にもならず其影暗淡なるべし其暗淡なる影が山陰幽邃なる草菴の戶口にさし來り庭の草原に僅に蟲聲の聞ゆる景情寂寥悽愴の幽趣言ふべからず

朝顔　京都　佐藤道子

、、ちりの世に露も心をおかずして
しほむもゆかし朝かほの花

評。世には古來古歌の作例に倣ひ其用辭の幾分を竊むのみか全躰の趣向も同じ事を言ふもの多し此の如き古歌の綴ひ直し幾百首出たりとて何にかせん故に古歌に例へは時雨を定めなきものとして詠みたる習慣あれば之を反對に取て返し他物や人世か定めなく時雨は時節一定したりとかよむこそ我歌なれされば此詠者は初學の少女なれど早く此點に着眼し朝顔は古來はかなき事を口惜く詠み來りしに引かへ人間の如く此塵世に戀々たらずして潔く凋むを賞せしはいかにも力あり用辭も露は朝顔と緣ありおくは露と緣あり有もせざるを見るべし

閑庭薄　肥後　下村房子

、、駿馬の道行人をまねかなむ
しづけき庭のしのゝをすゝき

評。風流は高尙閑雅を貴ふもの也故に歌會はもとより茶の湯俳句の會も然り評者始て京都に來り時に歌會に臨むに歌は頓着なくして飮食の會なれば會員は酩酊して殺風景極まるより評者は不興に堪へず凡斯の如きは初より歌會の名を廢して飮食會と稱するに如かじと遂に臨席せざりしが後大阪に下り彼地歌會の景況を聞き大に吃驚せりそは歌會の座に藝妓を呼ひて三弦を彈かせ儀太夫を招きて淨瑠璃を語らせ和歌の宗匠亦醉興に乘しドヽイツを謠ひ踊を爲すと和歌價直の下落斯に至て極まれり茶の湯の座にてアグラをカキ丼にてドブロクを鯨飮し大聲にてドヽイツを謠ふならば初より茶の湯を爲さゞるに如かざる也嗚呼大阪の和歌宗匠は俗劣にて斯る事を好めるか將た大阪人の卑賤なる好尙に阿附せるか孰れにしても和歌を汚かす罪人也故に遠望佳絶なる野外の小亭若くは泉石清雅なる山間の菴室是れ天然と化合する雅客相寄りて吟思を凝らす所此詠者も然り斯る閑居になつかしきは和歌の友より外に誰をか待たん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

幽栖泉聲　伊勢　宇佐美祐次

、、松にふくあらしはやみて谷水の
おとかすかなる山の菴かな

評。山上の松濤既に塵世の音に遠し更に渓間の泉聲に至ては其幽邃言ふべからず山窓肱を曲けて枕とし天眞と化合して華胥の國に遊ふ所謂長生不死の仙境か

秋別　京都　竹内梅子

、わかれ行君がたもとをなびかして
ふくも身にしむ秋の風かな

評。もとより身にしむ秋の風最愛の友と別離の原上に吹く其悽愴言ふべからず

山居　福田みか子

、、谷川の岩間を汲みて濁る世の
なかれの末もしらぬ宿かな

評。谷川の岩間は水最清鮮也之を汲て朝夕の飲用に供する菴は塵世に遠くして心志も亦清潔也清潔なる谷川の水も末流は人家稠密の市邑に入り汚濁不潔となるも上流谷川を汲む山居の人は之を知らずといへるは川水に緣をもたせて澆季の世名利利慾に奔走する姸悪の詐欺師社會には關係せずとの意を述へ高尚によめり

山寺晩鐘　京都　足利芳枝子

、、道もなき谷の奥にも山寺の
あればやひゞく入相の鐘

評。暮山の幽邃寂寞なる景情をよく寫せり

電氣燈　東京　今村幸子

、いなづまの影をとゞめて夜もすがら
暗もなき世となりにけるかな

評。類歌なくて始めて詠出せしならば宜しき歌也されど数子の歌に似たるものありしやう也評者今よく記臆せず

夢　廣島　井手睦世子

、ゆめの中に見しうき雲のさめてより
猶も心にかゝりけるかな

評。和歌は緣辭にて感情を活潑にする事多し此詠若し第二句をうき事のとでもせしならば價直は大に劣るべしされど雲とせし故下句のかゝりけると緣密着して宜しき也

述懷　岡山　堤鉦太郎

、、涙川しつみし我もよそ目には
うきたるものと人や見るらむ

評。然り是れ人世の實情也不幸憂愁は獨我のみと思ひ世人は皆幸福のものと心得る也何ぞ知らん世人各自の内幕を發けば我にもまさるべき困難苦痛あるか蓋人は己の不幸を一々口に言はさるより其表面を見て羨む者多きはあさましき此世ならずや

雑録

本邦男女に關する道德統計

頃日、ユー、ジー、モルフ氏なる人「社會道德に關する統計表」なる小冊子を著はす、就て之を見るに本邦男女に關する道德の統計を掲げ、多少の説明を加へたる者なり、此種の事項は、社會の道德、風俗、人情等を觀察せんとするものゝ必ず知らざるべからざる者なり、吾人は先づ氏が身、外人にして此の如く研究せられたるの勞を多とし、斯に之を紹介する所あらんとす。

◉人口　日本全國に於ける人口は、左の如し。

明治二十二年	四〇、〇七二、〇二〇人
仝　廿八年	四二、二七二、六二〇
仝　三十年	四三、二二八、八六三

東京市の増加は特に夥しく、大阪は比較的に増加少し、東京以南の諸國は概して少なく、西國諸國中、和歌山は増加力最も大なり、而して一ヶ年四十八万の割合を以て増加する日本人口の、生計の途に就ては、將來大に講究を要すべし。出生は人口の百分の三なり。

◉私生兒　全國に於ける私生兒の數は、左の如し

明治二十二年	六八、四九八人
仝　二十八年	八〇、一六八
仝　三十年	八九、九九六

二十二年は出生に對して百分の四なりしが、三十年には百分の七に達せり、其最も多きは北海道、本州西部諸國なり、少なきは本州北部にして、大阪は東京より多く、最も少なきは靜岡と佐賀とす。

◉結婚及離婚の數に全國に於て左の如し。

	結婚	離婚	結婚百に對する離婚割合
明治二十二年	三四〇、四四五	一〇七、四七八	三一、二七
仝　二十八年	三六五、六三三	一一〇、八三八	三〇、三一
仝　三十年	三六五、二〇七	一二四、〇七五	三四、〇〇

明治十七八年に於ては結婚に對する離婚の比例は四割なりしが、爾後二十八年に至るまで漸次に減少し、三十年に至つて増加し、現在は三割四分の比例なり、其最も多きは北海道にて、群馬は廢娼の結果にや減少の徴あり、概して離婚多きは本州北部就中甚たしきは秋田縣にして實に全國の魁と稱すべ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く離婚數は結婚數の半數なりとす、岐阜富山島根山口の如きも只秋田に一歩を讓るのみにして、甚た多き個所なり。

●娼妓及密賣淫　娼妓の全國に於ける總數は、左の如し、

明治二十九年	三九、〇七九
仝　三十年	四七、〇五五
仝　卅一年	五〇、五五三

其最も多きは、東京大阪北海道なり、三重の如きは四十個所以上の遊廓地あり、南方諸國は增加の比例恐るへき者あるを見る、二十九年より三十一年に至る二年間の增加は貳割五分の比例なり、之れ豈に驚くへき增加に非すや。娼妓の三分の一は私生兒（此内藝妓の私生兒を含む）と養女にして、一人の娼妓は平均每夜一人乃至三人の客に接する割合、豈に無慘の極みならすや。東京遊廓地にては每月の遊客平均二十五万人にして其費消金額三拾万圓なり、昨三十一年一月は、客數三十万二千八百七十八にして其費消金額三十七万八千八百七十一圓なりき、されば全國にて每月遊廓地に費消する金は二百五十万圓以上一ヶ年三千万圓となる、眞に驚くへき現象ならずや。密賣淫は全國にて八万人以上なるへく、大阪は最も多く、東京は五千人餘なるへし、妾を除きて藝娼妓を加へなば、東京全市の醜業婦は一万四五千人あるへし、本州南部地方は比較上多數なり。

●藝妓及妾　全國に於ける藝妓の數は、左の如し。

明治三十年	二七、五三二
仝　三十一年	三〇、三八六

藝妓の增加は實に上流社會の益々腐敗に傾くを證するものなり、今日の藝妓は高等淫賣と唱ふべく、娼妓よりも中等以上の少年の爲めに危險たるものなり、和歌山、群馬の廢娼地は藝妓の增加を見るへきが如きも、他縣に比して增加するを見ず、妾は昔時の如く生涯連れ添ふもの漸く減じて、數月の間約束してなるもあれば、計算すると難しと雖、全國にて八千乃至一万人なるへしと思はる。

●されば、日本全國に於ける不潔婦は。

妾　一万人。　娼妓　五万人。　藝妓　三万人。
密賣淫　八万人　總計　十七万人。

にして、現在全國の婦人、十五歳より滿三十五歳迄の婦人數六百九十万人あれば、四十人に付一人の不潔婦を出すものと云ふべし。

●右モルツ氏の統計は、概ね其筋の材料により……

▲女學雜誌記者……

云ふべし。

◉右モルッ氏の統計は、概ね其筋の材料によりたりとの事なれば、妾と密賣淫の外は、兎も角、中らすと雖も遠からざる者たるは明かなり、之によりて吾人は男女間の道德の漸く亂れ、風俗漸次に頽廢しつゝあるを認めずんばあらず。之れ憂國家の注意を怠らざるは勿論、之が同性たる婦人の敎育ある人士は更に一層の奮勵を以て矯正の事業に從はんとを望まざるを得ざるなり。(トウコン)

鬼面百相(其十、大尾)

青柳有美

審鼻學一端――相貌論斷片

◉人の世は、さまぐ\なり。時折りには、面白きこと又可笑しきこともあるものぞ。過る頃、我が鄉里秋田の『魁新報』といふに『撫子生』なる人あり。『鬼面百相』の記者が「肥え太りたるは、愚人の相なり」といへるを見て、面白しとや思ひけん、一日其紙面のうへに『人の相貌』と題して、色々書き連らねられたるうちに、かく云はれける。

▲女學雜誌記者青柳有美の「鬼面百相」を讀みゆきしに、中に「肥えたるものは愚なり」の言ありき。吾輩の如く肥りし男は、差向き愚人の標本として人間展覽會の陳列品たるなぞは、餘り有難き仕合に非ず、されど吾には「痩過ぎし男は僻み根性あり」といふ道理を見出し得たるにあらねば、このお挨拶はまア他日のことゝすべし。

▲小杉天外嘗て曰ふ、エライ人は肥たるか痩せたるかの一なりと。

▲己れ未だ青柳氏を識らず、人のいふ所によれば、彼れ嘗て痩形の男なりしが、今はいたく肥りて鼻下に髯なんど生せりと、彼の語を假りていへば、彼は次第に愚に近づき來れるなり。

◉一讀、頗る興に入り、何となくいたづら氣の起りければ、昨夜勢ひにまかせて筆を採り、之を『魁』紙上に送れり。その一文こそ、いとゞ怪しき限りのものなれ。されど、こは『鬼面百相の』記者が相貌論の一端にて、新案『審鼻學』の入門とさへ、述べ置きたれば、仲々に難有ものなりと知らるべし。文に曰く

●撫子君足下

僕が女學雜誌の紙上に『肉多きは愚人の相なり』いひしより、嘗て痩形なりし僕の身の、今はいたく肥りて、鼻下に髯なんど生せるは、將に僕が愚に近づき來れるの徵ならんかといへり。然り、僕は次第に愚に近づき來れり。僕の總身は、殆んど昔の面影を止めざるまでに肥滿せり。足下もし何故にかく肥りたるかと問はば、僕は答て曰はん、是れ將に結婚の結果なりと。僕が屢々云ふ如く、凡て細君なるものは、其夫を精神に於て殺し、肉躰に於て生かすものなり、妻なき時は、終日終夜苦絕煩悶、戀のために泣き、眞美のために首を傾くにも、爲に憂ふるものもなく、之を抑制するものもなし、故にその精神は絕えず活動して生くるなり。されど、之れによりて健康の損はるゝこと、亦甚し。若し妻あらんか、時來れば寢ねざるべからず、終日終夜泣き面のみに考慮苦悶するも、何となく氣の毒の思ひせられ、究學熟想のこと、大低にして亦切り上げざるべからざるに至る、殊に一書生の昔自由戀愛に身を焦し想ひを腐らす如きは、疾風迅雷、忽ち家庭に來らんの憂あり、是に於てか、勉めて平凡平意の好人物たらざるべからず、加ふるに、室内も淸まり、衣具も備はり、飮食のこと、隨て思ふに任かす。故に、其健康は壯快となり、肉躰は生きて長命せんとするなり、されど、精神の活動の、之れによりて掣肘せらるゝも亦甚し。妻は、斯くの如くにして、肉躰に於て僕を生かせり、故に肥滿せり、妻は、精神に於て、僕を殺せり。故に愚に近づけり。

かくの如くに思ひ至れば、肥へたるものは、凡て愚なり。是れたゞ僕の一私言のみならんや。かの西鄕南洲の如きは、肥て最も愚なりしものゝ好標本なりといひつべし、彼れ若し愚ならずんば、豈に月照と相抱て海に投ぜんや。彼れ若し愚ならずんば、豈に萬金の身を以て、薩摩健兒に與へ遂に城山の露と消えんや。海舟伯曰く『西鄕は、アーいふ時には、實に工夫の出ない男で、智慧がなかッたから、あーなッた。ナニ、あれ丈の不平黨を散らすのは、譯はないことだ』(巖本先生編海舟餘波)と。足下もし其身の肥れるの故に、愚人の標本として『人間展覽會』の陳列品たるに至るとも、敢て憂ふるに足らず、世人動もすれば、大東氏を稱に、『近江西鄕』の名を以てす。足下それ或は『秋田西鄕』にておわさんか。その肥りて愚人の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

相あること、寧ろ一大慶事ならずや。
是に於てか、天外子が所謂『エライ人は、肥たるか痩せたるかの一つなり』との『エライ』なる一語のうちに、二様の意味あるを知らざるべからず、肥へたる人のエラキは、泰然として將に將たる人のエラサなり。故に、縱橫無盡計策續出の才腕なし。痩せたる人のエラキは、天通自在將相のエラサなり。故に萬人之れになつき難し。前者の好標本は西鄕南洲にして、後者の代表者は、勝海舟なり。故に、前のものは王者たるべく、後のものは覇者たるを得んか。足下と僕との如きは、實に王者たるべきものなり。而して、感情の發展の、凡て顔面頬部の筋肉によるものたるは、僕が數々云ふ所の如し。故に、頬の太りたること、或は南洲或は足下或は僕の如き、智に於て些か足らざるところありとするも、情に於ては凡俗に秀でたるものなりといはざるべからず。
足下は、僕がことに依りて、人の相貌をいへり。故に僕も又少しく貯へたるを談らんか。
僕思ふに、人の面相に於て、醜美の最も關はる所は、その眼に非ずして、寧ろ鼻にあるものゝ如し。故に、之を假令ふれば、兩眼は左右大臣の如く、口は宰相の如く、而して鼻は帝王の如く、悠然として顔の中央に座り、泰然として全顔面を統帥するの色あり。されば、人の智力は、之を其眼に觀、その意力は之を其口に觀るべしと雖ども、其品格に至りては、其鼻によりて始て能く之を知るべきなり。是に於てか、日本舊貴族輩の鼻には『貴族鼻』とも稱ふべき、稍々歐州人種の『羅馬鼻』に似て、少く其背に當る鼻骨の邊に隆起ありしかも所謂鼻筋通りて秀で、何となく細く長くするりとせる通性あるものゝ如し。凡て男女の別なしと雖ども、殊に女子にありては、其鼻の輪廓、曖昧にして朦朧たり、低く太りたるは、醜く、明晰にして寧ろ痩せたるは美はし。又凡て幅廣きは醜く狹くしてがつちりと締りたるは美はし。且つ長きよりも短く、鼻筋は圓く鈍れずして、ゴシック建築の屋根の如く、眞一文字をなして鋭く隆起せるを好しとす。かゝる鼻ある婦女子は、たゞに其の見目美はしく思はるゝのみならず、才力の人に勝れて、世人を籠絡するに充分なる手腕を有するものなり。嘗て人あり、問ふて曰く『クレオパトラの鼻は如何なりし乎と。僕思ふに、クレオパトラ清少納言輩の鼻は、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

蓋し皆な此くの如きものなりしならんと。而して、男子にありては、鼻筋隆起して『羅馬鼻』風なるは、凡て熱情俠氣に富み、古丈夫の氣慨あるが如く、鼻端著く突き出でゝ『希臘鼻』風なるは、才氣智力の勝たれる人なるが如し。斯く、鼻の分類批判をなすは、頗る興味ある學術なるを以て、僕は何れの日にか機を得て『審鼻學』の一科を組織せんとするの念、頗る切なるものあり。

また婦人の乳房は、躰軀の美をなす重なる要素にして、恰も、鼻の、額面美に關すること多きが如し。乳房もし能くふつくり、膨れ上りて、兩つの間にパイハーボラ狀の溝をなせば、實に美はしく見え渡りて、頭を寄せて其胸に息まんほどの思ひするものなり。また婦人の顏色白くして、頰の肉中肉に、眼中稍々白痴眼に似たる白き閃光あるは、凡て妖婦の相にして、若し無敎育ならば淫婦となるべく、好んで若が作りなどし、折もあらば、男を釣り見んと心掛くるものなり。又、爪の端山形に尖りたるは感情家にして、ブッチリと斷りたる如く、爪端の一直線なる人は、情熱薄きが如しと。足下、以て如如となす。僕にして、若し、今時の學者の如く、

先人のいふ所を盜んで、我もの顏に誇るの勇あらば、藏する所のマンテカッチア氏『相貌論』より、なほ多くを取りて談るを得べし。されど、これ僕の好まざる所にして、又足下の共に好まざる所ならん。依てただ自ら考ふるところを述べて、足下が一讀の榮を希へるのみ。

足下は、又僕の『鼻下に髯なんど生せる』を聞けりと。然り、ただに鼻下のみならず、下顎にまで之を生せり。されど、今より二ヶ月の前、忽然感ずるところありて、之を俄に悉く削り落とし、けふ此頃は、髮さへ一分刈となしたれば、可憐、愛すべきの小僧姿となれり。夫れ僕は未だ學ばざるべからざる身なり。然るに、過る歲、偶々誤り惑ふて早く既に婚を結び、去りし五月の末には、妻は一男兒をさへ擧げたり。人もし僕が其小兒を懷にし、髯を撫で髮を梳り『チンチコ……コロロン……コロロンヨー』を歌ひつゝあるを見ば、其親爺然たる姿に驚歎して、道を敎へ戒を垂れ給ふこと少なきに至るべし。是れ實に學に志あるものに、進むに便ならざることなりとす。故に先づテル〳〵坊主の小僧姿となりて、敎を受くるに便にし、一には僕が小成に安んぜんとする惰氣に鞭

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

つなり。されど又、飜て思へば、髯と長髪とのお蔭も仲々に難有きものにて、之を譬ふれば、髯とは婦人の面覆の如く、山水に於ける霞の如きものなり。男子もし髯なく長髪なくんば、發相(エキスプレッション)餘りに明確にして、心中僅に一點の波動あるも、その影響直に我面に現はれ、人相の美を損ふこと頗る著しく、容易に地金の現はれて、甚だ醜きものなり。然るに、もし三千丈ならなくも、長髪美髯のあるあらば、發相頗る曖昧模糊たるを以て、餘り有難からぬ御面相たりとて、恰も面覆のうちに美人の顔を拜するが如く、或は霞を距て丶山水を見るが如く、夥しく人相の美を増し、所謂誤魔化しの利く顔となるなり。故に、密計陰謀を胸に蓄ふる策士政治家泥棒欺僞師、其他世渡りを誤魔化さんとする輩は、必らず凡て長髪にして美髯なかるべからず。僕、足下に告ぐ、足下もし髯あらば決して剃る勿れ。蓋し、佳人を誤魔化し、又當世の世渡りに便なればなり。僕今にして、深く之を削りしを惜む。…………

●此の文、紙上に出でしより越えて三日、『撫子生』なる人、自ら『山方香峯』なりと名乘り出で丶『青柳君足下』と題して、又た一奇論を試られたり。君、文士を以て我が郷地の文界に鳴る。爲に、その面白き一ト節を拔んか。

青柳君足下手教に接し蒙を啓くこと多し、僕曩には足下の文を魁新報と文學雜誌とに見き、よりて思ふ、よく矯飾なき赤裸々の情を披瀝して忌まず、時には傍若無人なる戀愛論を草して、僕の如き小膽の俗人を驚すなど、足下は普通の人間には一寸學び得ざる風變りの人物なりと、文と人とは時に相背さることあれとも、其文を通じて其人を想像するは穴勝難しといふにあらず、當時僕の想像によれば、足下は色青白く、肌膚に光澤なく、髮長く鼻尖り、鼻下に剃らさる疎髯あり、眼には常に異樣の光を帶びて精神亦不安の狀ある、極めて神經質の人なりき、よりてこれを松菴、木公に語る、二人其大に足下の實と違ふといふ、且これによりて足下の今は肥太とり鼻下に美髯を蓄へしといふ新事實をも聞得しなり、僕の前說あるこれが爲のみ。

鼻のお講釋、又僕の如き無學者にとりては創聞なり、然れとも僕の臆見を以てすれば、顏面の美は鼻よりも眼に負ふとこ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ろ多き如き也、鼻はいはゝ顔面の輪廓に屬し、眼は實に輪廓以上なり、（適當なる語あらん今は考及ばず）されば鼻は造化の神ならぬも、普通の匠人亦よく爲し得んなれとも、眼は神の力ならでは到底出來得まじと思はるゝ美妙の處あり、現に日本の疎畫なれば、鼻は略するも眼と口との點畫あれは、尙顔面を彷彿し得べく其一層書きなぐりものは口をも略して只眼のみを描き、又以て下手な洋畫家の生氣なき油繪に增すことあり、故に僕の考ふる所を以てせは、足下か審鼻學の組立にとりかゝらるゝ前、其詩趣多き文字を以て眼の研究を公にせられんことを望む、思ふに鼻立よくして眼の美はしからさるものは、形式完くして詞想の缺けたる詩の如きは、詩といふ躰形は具へたらんも、決して人を動かすこと得能はじ、殊に足下の命とする戀愛論よりすれは、一層眼の功力を認めらるへき也、參左たる目笑よく、人を活殺するの力あり、只鼻はこの點に於て殆んと無用の長物たるを奈何せん、若し鼻の發達の次第よりすれは、象は第一、犬は第二、人は漸く其第三位たるを得べきのみ。

「これにて、「鬼面百相」を完結し、その跋に似たる一文を揭げ、些か世の惑ひを解くべし。」

隨感

○成敗利鈍を顧みずとは何の意ぞ

古人曰く、成敗利鈍は顧みる所にあらずと。これ、何の意ぞや。苟くも志を救濟に立て、事を利他に遂げんと欲し乍ら、才の利鈍を念はず、業の成敗を顧はざるを可とするの理、何處にありや。われ之を思ひて諸葛亮の心術に尋ね、其の所云ゆる謹愼の在る所ろ、太はだ尋常に異なれるとを覺りぬ。夫れ人生の事、至誠已むを得ざるに發するを第一等となす。人心感激の致す所ろ、性情高潮の躍がえる所ろ、正に此時此躰の發作をもて、至眞至正の感應となすが爲め歟、去れば、人たとひ周密の思慮を勞し、機敏の手腕を役し、もつて能く功妙奇警の成効を遂げたりとも、惜しむべし必須第一の彼の至誠を欠くことあらば、事は成れりと云ふと雖ども情は徹せず、久しふして人悅服せず、自から慊焉として一物を欠くの憾みあらんとすらん。才子能く事業を成して而も人服せず、君

子往々敗るゝとありて而も人の納得する所以の秘義、むしろ此に存せずや。此の故に、大事に任ずるものは先づ大悲に涵養す。慈心大いに動きて身自から立ち、信念唯一、確然として離らず、たゞ已むとを得ざる。故に献性禁ぜざるに至るに非ずば、衆心如何んぞ之に感應せんか。近代に在つては、南洲西郷先生の如き、眞に其人なり。若し其の事業に就て之を酷評せば、先生の如きは寧ろ成効少なくして、失敗多かりしなり。最后、賊名を負ひて叛將となり、漫りに錦旗に抗して天下を騒がす。城山の嵐空しく吹き、壯士徒らに原頭の草を肥やす。十年の役は、遂に一大失策たるとを免かるゝ能はざりし也。而も精靈長く存し、巨魂奇しくも活き、人をして遂に先生を疑ふと能はざらしむるに至れるは、何ものぞ。先生は無名の戰を起せり。先生は、無益に英才を殺せり。先生の政治的經綸は、幾多の破綻を存し、其の戰ひは幾度か困するとありし。而して、人遂に先生の偉靈大心を疑ふと能はず、悦然として之を近世第一等の巨人となし、崇拜禁ずる能はざるの至情ある所以のものは、何ぞや。嗚呼、これ至誠感應の致す所ろ、人生最とも玄、最とも高の秘義存する所ろなり。

左れば告ぐ、當代の義人才子、其の誇る所の慨慷と機敏との外に、更に不可思議なる一物あり、以て一道の消息を通ずる所以の秘義を覺り、尋常成敗と利鈍との外、大いに恐懼戒愼せざる可らざる一事に徹底すべし。これ切めて吾黨下根の能く偉大に近づくとを得べき階梯ならめ。

○平安氣樂

偉大なる人物に接したるほど、掛念なきは無し、誤解さるべき心配も、餘計の説明も、世辭も、禮式も、惣べて入要ならず。法外なる望を掛けらるゝと、不道理なる要求せらるゝこと、出來がたきとに催促せらるゝとなどなければ、甚はだ心安し。裸躰の儘、之に接すとも、爲めに増減せらるべき氣遣ひのなきは、只但だ此の時ばかりなりけり。夫れ、たとひ偉大なりと云ふと雖ども、亦た人たるとを離れず。而して、人も尙ほ斯の如きなり。嗚呼、吾等、天道の絶大なるに接し、天父の至愛なるに對す。之を如何んぞ、言ひがたきの平和、心の底に滿ちざるものあらんや。之なきは、只だ思はざるの致す所のみ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○面白し、亦面白くなし

問ふ、汝、面白きとありや。曰く、無し。亦問ふ、汝、面白きとありや。曰く、有り。面白きとの有る無し、抑そも如何の差ぞ。夫れ、心煩らいあれば、和らぐとなし、一旦、凋如として心霧開け、清朗淡然として自得するとあれば、山は是れ山、水は是れ水、悟は是れ悟、迷は是れ迷、大小黒白、善悪清濁、截然として分る、渾然として同ふす、嗚呼亦た何の不可思議、何の面白きとかあらんや。然りと雖ども、圓満にして生氣なく、悟覺して活意なきは、尚ほ不可なり。無差別平等に觀じ去つて、心地常に波瀾なく、止水久しく滯ふりて終に腐敗の氣味を兆するに至つては、理想圓く熟せりとは言ふ可らざるなり。日に新たにして日々に新たに、又日に新たに、心氣活潑、生意勃々たるものありて、而も大悟の中點微動かず、日々に加ふるものを要するとありて而も悦如として自から足れりとし、大に貪ぼりて而も常に淡如たるとなかつせば、吾は倘ほ不可なりとせん。汝、多くの事に思ひ煩らふ勿れ、一日の事は一日にて足れり。左れど、あらゆる物皆な天父の心を顯現し、造られたるものは、世の初めより之を見めす。野の百合の花、天の鳥に眺めて、日々に新學を得。凡そ此邊の樂趣如何んぞ筆紙の能く盡す所ならんや。此をもて、吾は、面白きとあり、亦面白きとなしと言ふ。

○さすらへる犬

何處よりか犬一疋來り、尾を振りて去らず。吾之に食を與へんとすれば、傍らより制めて曰く、一ト度び食を與へば決して去らじ、强ひて與ふる莫れと。吾黙して止む。翌る朝、起き出でて見るに、犬倘在り、彼の餓たるらしきを見て、復た食を與へんとするに、傍らより告げて曰く、彼は何故か食はずと。吾亦黙して止む。其の夕、彼の衰ろへたるを見て、遂に自から與へたるに、左して多くも食はざりし。傍らより評するもの、曰く、彼は唖なるべし、未だ曾て鳴かずと。其の夜々半、彼れ大に鳴けり。次の朝た、吾早く出でて散歩する時、彼狂喜して從ふ、中ころより留まつて進まず、只連りに危懼す。傍はらなる人曰く、彼は前の日、或る犬に噛まれたるなりと。余は家に引退せり、彼も亦た從がひて歸りぬ。之

れよりして彼は吾が家の食客となりぬるに、數日にして家人皆な或る濱邊に行き、吾も數日家に在らざりしが、彼は見へずなりぬ。嗚呼、猫は家を主として主人に從はず、只だ利己一邊の畜生なれど、斷えず家の內に橫行し、主人の膝に乘り、食ひ物に不自由なく、夜は勝手に鼠をあさる。犬よ、汝、忠直に生れ來て、偶として主人を失ひ、さすらひて新らしき君を求む。未だ君を得ずして、忠心を寄するに堪へず、冷やかに孺子の捧擊に合ひて幾度か悲鳴す。嗚呼、主なき犬よ、流浪せる犬よ、無二忠勤の心の寄る邊なき犬よ。

面白の濱邊の紅法師

寄書

曉想君

あかつきのうしほにうかふ一葉舟
なつのあつさもわすれけるかな
しののめのすずしくにほふ紅星を
いかになかめてきみやいまさむ
* * * * * *
花子の君はまつやまの
みどりすずしき下陸に
ころもかたしき東雲の
うす紅ひのいろうかぶ
空を仰げばビイナスの
かみもはぢてむ面影に
うかひていつる片靨
やかてたまなす白露に
星あかつきの色添えて
黑髪そよくあさかぜに
こいの哀もしみじみと
ぎくもうるはし明の鐘

時報

◉フレベール會　明治廿九年四月廿一日フレーベル氏の誕生日を以て發會したる同會は、高嶺秀夫氏を會長とし、目下會員數百四十名にして、內百三十人は婦人男子は僅かに十名なりと。

◉日本赤十字社　の看護婦外勤部は、世間の需用次第に增加して目下四十餘名の勤務者あるに拘はらず屢々欠乏を告ぐる狀況なりと

◉京都婦人慈善會　事務所京都市上京區烏丸通二條下る秋野々町第九番戶、目的有志婦人を以て會員と定め社團法人を組織し盲啞孤兒教養の費を補助し及罹災其他窮民救濟等慈善の事業を爲すを以て目的とす、出資の方法會員は每月金十錢宛を出資す便宜に因り一箇年分を一時に出金するを得又會員と否とに拘らず有志者の寄附金を授納す、理事京都市上京區寺町通丸太町上る松陰町第十三番戶新島八重子にて去る七月二十日登記を經たりとぞ

◉井口女史の留學　高等女子師範學校出身にして山口高等女學校教諭たりし井口アクリ女史(秋田縣人)は今回文部省より米國へ官費留學を命ぜられ九日出發の筈なり

◉臺灣普通教育　の現狀に就て臺灣國語學校長町田則文氏の語る所により女子に關する事項を抄記すれば、國語學校の附屬第三校は臺地の女子のみにて百九名あり、尤も女子校に於ては普通の技藝(造花刺繡、臺灣風裁縫)を主として教授し生徒は八歲以上三十歲迄のもの打ち交りて孜々勉學せり最初は家庭の貧富と男女とを問はず入校を許したるに對し臺人は殊に異想を起したりしも近來は我教育の主旨を知り喜ひて勉學就學するもの追々加はりたり又三十歲前後の女生徒は其子女を携へ來りて就學せるもあり是等の女生徒は卒業の後他の教授を託するに成績皆に頁好なるものあり我假名文字の習得し易きにより教授上漢字の煩勞なるに比し頗る好成績を示しつゝあり

◉護國婦人教會　鳥取支部は、會員已に三百餘名に達し去る廿五日第一回を開會せり、同會は村雲日榮尼公の創設に係る者なりと。

◉福井小濱佛教婦人會　は去る二十二日發會式を擧げ、大内靑巒氏演說、七百餘名會合頗る盛大たりしと。

◉少女の鑑　滋賀縣栗太郡石部村字中清水町服部やす子、みれ子姉妹、工女となりて四百五十餘圓を貯蓄し、家道頹廢を挽回するに力む。⦿女鑑　福井縣足羽郡六條村天王の堀田與三次妹てき子(若越新聞七月十八日)◯貞婦　栃木縣下都賀郡家中村大字合戰場館野さだ子(下野新聞八月一日)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎外　報

○英國の子女と其職業　本年四月廿八日の英國國會に於て議員スパイサー氏の教育事業報告中左の統計あり頗る有益にして面白き節あれば左に示すべし

（童兒の職業）

新聞賣子　一万五千百八十二人　走使、傳使等　七万六千百七十三人

農業に從事するもの六千百十三人　雜事　靴磨き、庖丁磨き、給仕、叩き起し（是れは職人など毎朝出勤時間に遲れざる樣戸を叩き眠りを覺し歩くもの）等一万九千二百六十三人

（女兒の職業）

子守　一万千五百八十五人　洗濯業及家事手傳ひ　九千二百五十四人　裁縫業其他　四千〇十九人

以上子女等得る處の收入は一週間平均一人に付僅か一志に過ぎず中には食事付給料を受くる者あれど甚しきは食物或は衣服又は食物、衣服の一部分のみを支給せらるものさへありと（京華）

○獨逸大學と女子　普魯士大學にては婦人に通常男子の學生と同席聽講するを許さゝるの制規なるも聽講希望者には特に教授の取計ひにて或課目に限り聽講を許すことあり、獨逸伯林の婦人團体は去る頃議會に正式的に婦人の大學聽講を許すべしとの請願を提出したり、此請願は獨逸婦人の高等教育希望者の增加したる一證として見るべきものなるが現時斯かる希望者は四百十四人あり內伯林大學に二百卅八人ボンナ廿六人、ヘッテンゲンに三十二人、グレーセルワルドに廿七人、ガールザに十五人、キールに十七人、ケニグスブルヒに三十三人、マルブルヒに十人あり其年齡は二十歲以下の女子廿二人、二十歲乃至三十歲の婦人二百五十八人、三十歲以上の年增百四十二人にして之を國別にせば獨逸人二百七十七人露國人五十九人米國人五十人なり又宗教に別ては新教徒三百人舊教徒二十四人猶太教徒八十八人にして有夫の婦人三十六人未嫁の女子三百七十四人寡婦二人なり、此內歷史及び哲學の研究者百五十九人美術及び文學の研究者九十人博言學の研究者七十二人物理學及び數學の研究者四十八人醫學研究者十四人齒科醫學研究者三人法政學科の研究者十三人神學研究者九人古語學研究者四人にして該女子の父の職業を探ぐれば中以下の官吏二十三人職工三人商人四十四人農家二十四人軍人十七人高等教育を受けたる者百三十三人中等教育を受けたる者十三人なりと（東朝）

○萬國婦人會議　萬國婦人大會は去月二十九日倫敦に開かれたるが會長アベルチーン伯爵夫人は簡短に同會の旨趣を說き且つ列國仲裁々判は第一綱目なることを宣言し婦人に關する一般の消息を通する爲めに萬國婦人通信部を設置すべきことと最後に罪惡を救治する義務を婦人にのみ負はするの非を論して出席婦人を警告したり而して其會議は政治、職業、法律、監獄及社會改良及教育等の各部に分れ各部各議長を設けたるが婦人の國會議院撰擧及撰擧權等も其議題中にある由

○英國々會と婦人參政權　英國下院に於て聯合黨議員コートチー氏は倫敦市制改正案に一の修正動議を起し婦人にも倫敦市會議員たるの權利を與へんとの提議を爲したるが百七十七に對する二百四十六票の多數を以て否决されたり將た同國上院にても亦た市會に婦人を入れざるの修正案を可決したりと

要目一覽

◎新女大學	時事新報。七、廿三（第十六回）以下
◎生意氣なる者（女子教育につき）	報知新聞。七、廿三
◎女生徒と袴	信濃毎日新聞。七、二十、以下
◎宮內大臣の注意（華族の婚姻）	國民新聞。七、廿三
◎宮內大臣の告諭に就て（仝）	時事新報。七、廿五
◎婦人の職業	人民。七、廿五
◎日本婦人の旅支度	仝。仝
◎教育及女學に就ての雜感	福島教育（五十二號）
◎男女の學說（續）	時事新報。七、廿四以下
◎夫人の素顏	報知新聞。七、廿九以下
山本權兵衞夫人登喜子（續）	
◎令孃鑑	
中原初江子（七月廿一日）秋田芳子（七月廿六日）育地繁子（七月廿九日）	千代田日報。七、廿一（九十三回）以下
宮田藤子（八月一日）	
◎女學校巡り	千代田日報。七、廿一
女子裁縫專門學校（續）	
◎側面より見たる眞家	萬朝報。七、廿八（以下）
◎幼弱者の保護に注意すべし	時事新報。七、廿七
◎婦人問題と教育（續）	天地人。八、二
◎加藤敏子女史	救濟新報。七、廿五
◎家庭の栞（簡易料理）	大阪毎日新聞。七、三十以下
◎女生服裝問答	信濃毎日新聞。七、三十以下

巖本善治編

再版 **海舟餘波**

一冊金三十錢
郵税金四錢
郵券代用
金三十七錢

海舟先生在世の日、編者毎週其門に趨りて清話を聴き、歸つて直ちに筆記し、一々其眞面目を書留めたる者、今殆んど堆を成せり。蓋し世上大率れ幕臣の勝安房守を傳えて、偏えに其勲功を賛す、素より是れ可ならざるに非ずと雖ども、先生苦心の存する所、寧ろ其幕府を明渡すにあらずして、反て明治新政府の維持建設にあり。但夫れ先生能く形跡を沒し、功名を譲り、巧に韜晦して種々の評を避くるの故に、當代多く之を知さる耳。今や先生一去して、亦之を秘するの要なし。此書、主として此般の消息を傳ふ。坊間既に一二の著書あり、略ぼ其梗概を言へる者の如きは、此書皆省き、凡そ先生の事業言論にして未嘗て世に出でず未曾て世の思到せざる者を輯收す。悉皆編者親しく聞く所にして、毫も他子の文を加えさる也。又別に先生の寫眞を添ゆ。是れ最近の撮影に係り、コロタイプによつて製作す、銅版鉛版をもて比す可らす。眞采歴々、光奕爛々として面あたり接するが如し。又先生修辭の文稿一篇を寫眞版に附し併て添ゆ。是昔し山岡鐵舟長逝するの日　先生自ら偈を作て弔する者、其辭悲痛、追人知己を惜むの情、流露澎湃す今ま斧削の痕點々視るべく、眞に一代の珍なり。如今再版成り正に發賣す。同好の士希くは一讀を賜へ。

東京巣鴨村庚申塚
女學雜誌社

女學雜誌社出版書目

巖本善治著 再版	海舟餘波	正價金三十錢 郵税金四錢
巖本善治著	吾黨の女子教育	正價金十錢 郵税金二錢
巖本善治著	公娼可滅	正價金三十錢 郵税金二錢
島田三郎、植木枝盛二君合著	廢娼演説	正價金三錢 郵税金二錢
櫻井成明君譯	腓立比物語	正價金二十八錢 郵税金六錢
横山雅男君著	婚姻論	正價金十二錢 郵税金四錢
若松賤子君譯 再版	小公子	正價金三十五錢 郵税金八錢
故若松賤子英文集 英文	嚴本嘉志子	正價金六十錢 郵税金六錢
布川靜淵、故小此木秀野君合著	俳諧史傳	正價金二十七錢 郵税金四錢
故鈴木弘恭君述 七版	百人一首講義	正價金二十八錢 郵税金四錢
同	文法口授	正價金十二錢 郵税金二錢

故若松賤子女史譯述

再版 **小公子**

全一冊洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵税八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝと數十百回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化す、德に隣あり、哉に作人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て廿露慈雨の如し。讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らす、婦女老人亦讀まざる可らす。賤子女史嚢に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かす、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、郷友松井昇氏は密稿を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元
東京日本橋區本町三丁目
博文館

大賣捌
東京巣鴨村庚申塚
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治二十五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY